

昭和四年日記

# NOTE BOOK

1904年

---

~~~~~

---

夜光雲

くはけとし空の  
一角あかくと  
夜光雲中き  
讚仰す吾は

田中克己

序文

青春は過ち行きながらヨウ人の人達ト

饒舌と憂鬱の相及しん二傾向を与へ

饒舌の中に私はヨウの物を知つてゆく

憂鬱に固まって私は考へて来た

私の血の中のこの二要素が去り来り度には

私の青春が燃焼してゆくのを明に知りながら

それは如何ともし加ない勢からある

此の力は抑えて私は歌ひ考ふ

歌の所は私の眼にうつた否私の心を動かした物の

すべりあり思ふ所は私の心觸れた物である

饒舌を代表するものかゆがしも歌ひを憂鬱を代表するものかゆがしも思考するものかゆがしも私に

声の出し時は深い思考の淵に沈む

然らざる時は深い思考の淵に沈む

此の二つは私にとつてあらゆる事々の凡てあり

此の二つは影知者せざる所の物は私にとつて何物ともない

命をうけと歌つた昔の詩人よ

私も歌はして世は、キキ(ま)しともらば、

命のけをり、また命のはじめを、四、一、九

友

僕ノ遺産ハコレヨリ外ニナイカラリ。

山領丘 耿太郎

奈良行 (十四首、中)

生駒山吾が越え行けば水車をやみまなく峠はのど水

春浅め梅まだ咲かず山寺はひどり鳴かじ静かなるも

鳥居の上は石のせれば幸ありと男三人競ひ投ぐるも

これやこの春日の野辺に春浅の風に吹かす(み)し竹柏の葉

山懐を見出とい(人)あまたそか申にして尿する人

。丸大人、本宮朝臣ト僕

四、二、一

百舌鳥耳原 (三十四首、中)

踏みつけしすいめのこ人い、青くしてほのほの香は匂ひたるかも

百舌鳥耳原南の陵に程近く柵の花は咲きてありけり

野草のたわいの枝に唐鶏は鳴きまて(と)も青芽ついはま

なにかしの命のみ墓のほり立ち、柵の花は盛なりけり

みまむに咲ける椿はあぐらせ、堀辺に赤く二の木とぬるも

。同行丸大人

四、三、二七

生駒行

水車小屋のそばは人の気配なし水車は白の車、葉をり

水車小屋のそばは水の二の木と(に)はけりの葉はあらがけり、

四、四、二一

颯風来

颯吹きてホアラの若芽片をひましつ、せやける女は水とは見つ

奉迎天皇行幸作歌 (十一首 / 中)

常御見入阿倍野之原毛大君乃行幸處戸聞者畏古箴  
 大王之御心廣見六百乃中乃一人产吾幸迹可由  
 大王乃行幸有禮政現身乃命暫者心尔可計武  
 大王者神四座世改穴玉蟬乃眼津分禮天龍顔見難天武  
 櫻乃本乃弥继尔傳天武阿倍野乃原者行幸處

四四二一

野茨の花 (十首 / 中)

本屑浮き水草生ひし古池におほひかよさる野茨の咲く  
 野茨の花枝よしなし古池に浮草生ひて影もくらうす  
 野いほらの花枝たわめて古池におほひかよさる水に漬かむとす

四五一六

あかしあの花 (六首 / 中)

川の辺のアカシア並本と真白に房の花咲き朝風わたる  
 朝風にアカシアの花中らあつ、水かみぐの川にうつ水  
 今朝の雨にアカシアの花のゆぐたすその花あまた淀川に流る

四五一七

生駒行 (三首 / 中)

伊賀伊勢執事につづく山脈上高く晝月あり悲しき色に  
 鳥鳥三十三羽の一群かまひるの月に内を掃くことへり

四五一九

播磨野 (八首 / 中)

はらまゆをばしく来水ははらまゆな海こそぞ (と) 白き雲立つ  
 ともしの明石の大門のさし水波、波のななた上浪路島見ゆ  
 日曇り空低く垂水たりはらま灘海のあるたの島山見えず  
 球場のまげの家瓦屋根つゆは水の陽にまよしく走る  
 かすかに木々を吹く風アウラウラの葉裏の白が目痛く見ゆ  
 けりまゆに (と) 水夾タリとて女らの野のをちこちには水たもか見ゆ  
 たそか木のぼうま大野に煙立つはらま女が来り焼くらしき

四六一三

木蓮サ花

ふ (と) 白と見し木蓮華比の朝は未赤はみたまさに散らむとす  
 つゆのもり枝の高處の木蓮花空に大まうせゆらいでとる  
 梅雨のあめすむにすむみ小川の辺の木蓮の花未だ咲きつぐ  
 木蓮の花の咲きつむ水として今年梅雨もすむにすむなり

百日紅 (三首 / 中)

朝の向の斜日と照し百日紅蛇し (と) 来て花粉をちらす  
 祖父にトマト葉つて帰る道羨み木の葉に照し赤トマト

京都行 (三十三首 / 中)

皇の間の坂道白レヤウの田の自轉車押してのは水好

白雲は白くはすむに隠れたる竹のそよばたうへ見ゆ

なみちの青き傾斜に赤牛が尻尾振りつゝ草食する見ゆ  
電車を電線はするんすむと竹のそよばたの向し聞ゆ

はるくし丹波境の緑山嶺の彼方の空に雲の峰立つ  
雨あとの竹の林に立つもやの中を細々道のかた(一) (以上新嘉坡車中)

雨より木々の枝葉ゆしたく水溜の下にゆる、代目ボート  
小倉山山峯の向より立つ雨帯の動き速し今し山はなる (以上風山)

夕雨の動きを速み小倉山山峯の向よりあはけにけり  
瓦屋根にま白照あつま此のふるを何れの本にの蟬鳴をやま

雷の音の止る向して輝つた所の林に鳴き(一)見ゆ  
雷の音の高き雷過黄緑の葉は強き陽に葉に垂れてるも

雷の音の止る向して街道を自動車喇叭をならしてけり  
夕立の雨降り出でぬ風強き小鳥遠方此方と迷ふ見ゆ

雨止みてしほしの後の強陽照り向つ尾の上を走るとく屋根  
雷の音は未だ止まざり階下をさすサ落雷話友と聞きをり  
のいばらの垂枝あやなしせ更波りの水に押されて猶もはゆか(一) (以上四垣宅)

四七・二七・及二八

古高名濱(十九首、中)

夕暮の勢波の山わが前の山の向ふへ人泳むをり

おと波お沖にまにけりはるかき、磯<sup>磯</sup>茶屋に旗ひが(一)

いなり波いく童の彼方磯つ辺に茶屋の赤き旗ひるか(一)

いなり波この手止むれば舟のせと磯に走れどなほ遠き磯

沖にして山の彼方へ白雲の起るゆいしと漕ぐ手とめつ

白雲の起るゆいしとわが友と声をさう(一)歌の俗謡  
わが友と歌(わがわいし俗謡は二、沖にして歌のゆいならず

こ、はてわいしきわが水くわがこみり茶みは身をひそめ居り  
雲たえてしげりく浜に真日の照り沖におとのかやくか見ゆ

雲速しま目のかやりの沖辺より磯に進みて黒波来り  
わが友とやく一丁の煙草のこ、はてわいしはてわいしはやく

サ落陽(八首、中)

四八・五・及六

此の夕波まぶとす陽を見たり今か波と待てし魚しす

赤々と波まぶとす陽は我の眼とそり書り如く痛めたりけり  
道傍に親子三人か小手かざしサ落陽を眺むるをわがはえつ

此の夕明日も昇らむ此の日子とあ木の思ひて見ゆならんは  
西山に陽は沈みけ小なめをまき息はと吐きて復西を見ず

四八・九

乙伯號来(九首、中)

乙伯號来と喜ひ独り歌の強きいひまは

歌声の強きいひまに愛國の情こもると吾がまこころ  
夕嵐の着陸場は独り人おどり叫びてさう(一) <sup>見ゆ</sup>

男やも雄々し健しと海山の二千里送て駆け来しはや  
独り人うわが海相の長々し歓迎の辞に足らずしてけむ(一) <sup>見ゆ</sup>

四八・一九

大和行 (同行伴田与重郎君)

足痛のわきに何をも幾曲り道にしろく埃をひかふ (大野一様原)

向つ山の茂みに香き花海州常山花の中より雀をひまゝ (伴田一様原)

山崖上の自まますべり日雲り空に板の高處の花のややかさ (ク)

朝日さす丘辺の道に蜻蛉のちあまむれと心翹かやけり

蜻蛉のちあまむれと心翹かやけり (初瀬一様原)

くらはしの山の頂もやかかりそのもやの上は朝日子晒らふ (ク)

今すむし小き登りか村境家毎の標札のなきて知りし

おまつもの名張の山はわか通り道のまはみか雲立ちのめほり

木標へそと眺むる赤人の草をのあたりは (白雲)

川の上にかんむと咲けたる花をきき嘆きの盛としつむりか (ク)

山角をまはりし水に山の雨しよきかりて眼鏡曇らうす

縁重山縫ひ込し水れぞ今ニは室生大寺あうけりわたる

杉むらの葉もくう方陽は竹魚草の大き葉の上は廻りかけりせり

室生山繁木か下の椽の木の稚木臺しも陽走 (室生道)

たまきはる今叩かなしと室生山繁木か下の七葉稚木見つ

向う山岸にまむ咲き残し花ぬむの色いちじりし後の杉に

いくまかり道を二重う之今こにわか見し塔のあやのしつむり

ちほれふし神の藝術か向つ山少年とそり立つ石の柱は

向つ山をなせる山巖は神業の石の柱といわれぬるも

山峽は往來ともしか来り途中すこし葡萄のなほもかちぬる

材木を並み立つ川の辺をばく来た水高たこり山石

下草の羊歯のぬれ葉のもつ走此の杉山にみちそふ見ゆ

白日風甘んらわたり甘ん葉の葉毎に反射す走の痛き

對山岸の大きな佛足痛の星をさす友と見てをり (以下大野寺石佛)

河幅のや、広げれば石佛の尊ま相もわ水知りかこし

絵葉書に今見しみ顔石佛は尊ま相もわ水知りかこし

今更ん尊む心對山岸は香ほな甘んみ顔見難こぬ

並み立ちみ佛の前も佛相を見せしわ木の嘆りこり (於帝室博物館)

並み立ちみ佛の数をけ小とよぶ動かぬおのむし

甘ん青ま染地の中の葉櫻の幹に鳴ましく蟬かのみ見ゆ (以下新葉師寺)

新葉師寺の門外葛青ま染地の向う道曲り見ゆ

追加

四八一五

わか友と甜瓜割るる所道自動車立て、すむけり (大野一様原)

自動車、埃おほふと割るかけのまくわいのせし指の思は

又葉畑に雀こま来て二羽雀とまらんとして枝をゆるがす (初瀬構急)

枝のゆれや、大まけは雀とまおのわおのうまてまたもとび去る

302 陽のあたる、ましまし道ト幽か存るまて見えし、秋葉稚の花

御佛は、うまきたまはす、くそみの我の吐息、耳鳴り、耳痛り、耳

み佛は、あまたおはせ、此の空に、今命をけ、は友とよりのみ

向つ山、峰のま、白き雲あたる、と見えは、峽に、時雨降る来り

杉の本の、毎葉葉と、とほす、陽の光、わ水か、眼に、涙み、まひし

塔の九輪の空を、白雲は、迅く動きて、杉に、影の、木、の

國境、近し、も、おまつもの、名張の山に、雲を、なかく見ゆ

國境の山脈の上、雲を、なかく見ゆ

9 30 杉山を、さやかに、ほる、俄、風、九輪の、鈴、の、ゆり、か、見ゆ





かびたりと来ます。百丈の下といはるんてもしつといふことばかあよるせう。やたらん  
漢文的の言葉はをまじりしゆなことはありせんから。

白田子のもう一つの欠点は主観句の有り無しです。主観の歌に對し主観  
の歌が有ることは不思議はありせんが主観句が有る日あつたのが困ります

ふかき観歌のつつかいわけです。佳句が佳しいとかいふこと、こゝちよい、いやた  
ないといふ言葉を使ふ時はその歌は独りごかりになります。秋の風が吹いて

かたしといふ歌があつたとすべし人はその月並と見ます。こゝろいへはあは  
自分のため歌を作るといふことばは小まきか人に見せられ小まきものかと

してゐるせうか。大抵主観的官能的形式詞は普大抵主観句の  
はありませぬ。こゝろは万葉集をのりててもあかります。もうこゝろ(きつ)の  
せん出すことばをのりす。この時ん出来ぬ歌が主観歌のいふものなるす

あまの晶子の悪口をいふすむなやうな気がしますか。こゝろは要するに明星  
派の逆反的(己の感情をい弄ぶ)の歌に對する考(方を排したのす  
今いうまきうひのなない晶子の歌を弄んでみませ)

かほせみや前の流のつふらるつふくかあまき 冬の日のまゆ  
象を降り駉駉とくかり母とよびその一人かに走りこよかし

うら悲し此の信濃の高原の明星の場いれかあること  
海鳴りやあてんの原の芝草のくる所はきりおしんして  
よめるの歌のつ高のしらはすすかんと思はせませぬ。三三番目の歌の主観句  
はこゝろ(まき)を弄ぶ悲鳴と思ひます。その他の客観歌はこゝろ(まき)を  
いふといはずしてまじりしを感せしめ或はこゝろ(まき)を弄ぶ人の心のまゝに思は  
しめませぬ。こゝろが客観歌の使命なるす。

二. 小主観的 歌

前の晶子の事でも小主観といひました。こゝろを説明します。  
島木素彦の言葉をかきまます

「こゝろいふ、こゝろいふ、こゝろいふ、こゝろいふ、こゝろいふ、こゝろいふ、  
かう抽象された概念を言ふ。それら感情の直接表現と思ひのはまじりか  
ある。感情とは心が事と物とに對して活動する一種の狀態である。  
心と事との互に交渉する状態をそのまゝに記すが感情の直接表現であ  
る。(中略) かく種類の詞は心の活動の種々の場合を著し得(まき)普  
的を詞にすむけ感情活動に對して表現の直接性を失ひ何があ  
先づ大体こゝろ(まき)ならんと思ひます。こゝろを實例によるる見るとこゝろ(まき)の  
ます

人々と雲をへたて、立つまじしま山の夕まのれか  
碧雲軍烟の向の湖の光りたる 信濃の國に 目覚めたるまき  
晶子のこの歌は恐らく旅人の歌の中にも傑作の中に入る(まき)の思ひ  
ます。如何にもまじりし情景をいふ(まき)の思ひ、こゝろ(まき)の感情のあらはれをまたま  
向からうまじりしと云つてこゝろ(まき)の時私達はすやうするかと云つて引下りありは  
方があります。まきの歌の中にもまきの歌のあらはれをまたま  
す。しかしこゝろ(まき)はこゝろ(まき)私達は皆まきにすやうしてこゝろ(まき)をして  
いれりて人肉と悲傷的人肉はかなとを 案天家はすかしくしと  
りり(まき)感のまき(まき)それらまきの思ひのまき(まき)向  
ない。まき自身を弄ぶその時(まき)の感とまき(まき)の思ひはこゝろ(まき)の  
或はまきのまき(まき)を弄ぶこゝろ(まき)のまき(まき)の思ひはこゝろ(まき)の  
歌にうてまき(まき)を弄ぶ。こゝろ(まき)はまき(まき)の中(まき)にまき(まき)のまき(まき)の

こゝに書きます。

まゐる歌かあります

星のふる夜空の下にちかくいはいそばの母はもえこゆまけり

此の歌の境地も考へれば其吉はまこと泣いておれりかひありませぬ一悲し

さん けいここゝんけいこいこいこはかありませぬ 二いつは母か死んむん

悲しくないかと思へ人はまゝ驚いてせよ) 私ほえんを歌ん及びえんを歌ん作

ふん 頭を下げずんはぬらませぬ

哀れなる蚊張つり草不幼児の手は二つん引ひかか

寛の歌です。こゝを此細をこゝれ哀れこゝれ彼の見識をこゝれかあ

先ん私達はこゝれもう一すしん言はの遊戯にすまないことを免れりませぬ

寛氏はもし自分か日輪愛の妻品子が死んむらうんを歌をつらなるか

思はさるませぬ

赤彦は子供か死んむらうんは一年事もその歌をつくることか出来ませぬ

え、や、れすればハ感傷に陥らうしなからうませぬ 子供か死んむらうん

こゝれは歌んませぬ 却て面白くませぬ しかしアラ、おれその地帯

からう大歌人達はハ主観のかたしん言て詞を使はなかつたかと思へば

こゝんしていんくしませぬがびん 追々山い雨つれいぬ 哀

よゝまの春の夕のちかま通牛るる牛のんほほほほ

その歌もあゝ 要は詞の申根に浸み入る力をもたす丈夫の實力か

なければむのむむむむむむむむ

大依りんし、かましんしとる詞は子供や婦女の詞であつてそれれらむん

前です。悲しむや、いれしその根はハ声かあまいつの普通通でせよ

歌かつてそのと書かす

三、人々世間の事

先刻も一寸書いたが歌には深さがなければ駄目です

雲霧の夜のはなれまけり月人似て青くくればいんむらうの花

また品もも捨てるあましたかの有名むらうり男のいんむらう

この歌は上虎杖も知らぬ人んはともかく知てる人ぬはアレ女の虎杖も

も、ま、く形容したな位ですんむらうの歌です。こゝを歌を形而下の歌といま

す、れ、う、そ、れ、以外に何の(念)包す所もなからうませぬ

善魚池の梅雨深みかもしるりとと春の無花果果葉をいんむらう

こゝれ一寸見るとそそれ丈の歌です。しかし無花果果葉を知らる人ん

見んむらうあゝ人んとして、殊にこの境地んむらうのものさう人んとして

境を再び呼びかこすんむらうをい。この歌は日輪のえか何から何まむらう

こゝれこゝるがさす、りぬおれ月へ似ると思はぬといは、いんむらう、あ

霧の夜の月を見たことのない人んも味あはは不り能とすませぬ、ア

かたくなむらうのさす、あゝの歌をいんむらうと思へんこゝれは太

いりませぬ、後の方は自分の見えませぬとすませぬ、まゝとい

ると投り出してあるのさす、そして自分も何なれ、かみしめてある

こゝれを合世間の事、歌といひませぬ

この順気のつらむらうさ、俳句には何せんかあけれ、をんて

ん、形が短いかういひいを詞、余地かなくなつたからむらう

人は俳句の方をむらうかしかうやうませぬ、物に物かぬむらう

ませぬ、歌はより大形か長かだけいれぬ詞も入れ、ア、こゝん

やうませぬ、こゝれは少し考へればならぬと思はませぬ

合世間の事、歌、例をあげて見ませぬ

夕湯もの云はゆ牛つめ水来てもはら 頭をあらはせり 茨吉

あつかりの船が、野の鳥おきて啼かざりしか入る赤まん

かやけ(すぢのみまは)けてかしく、と風吹まつやまけり 和云

せんくときくも水より夕づの川んぬく時なくぬがまいしく

船着場をかりし船とま日のもとあひか、はれりこのか、けり

えな歌かいはわゝ象徴歌にあらう、

茨吉はいつて、雪生りの極致かゝ象徴やあゝ

實際、只物事をいつしたん 過おさいものよ(そのまゝまんかまざん

らう)その中んころ、作者の生命のむまが何となく看取するやうに思

はれよーそれかゝ象徴歌なるあらうと思ふ、一因に象徴の名を

かよせのほは何かと思はれ、ふりく水ばふい、歌のむま、かまへあたらぬの

けないのだから、

四白分の好悪する歌

今迄書いて来たつ、自分の野の空虚さの層想をつかした

幼ゆけつきせぬ理屈を云つて、自分分りえぬもなかりせんか、これから

具作のへんし、諸名家の歌の批評をしてみます。 偶々、おけん一頁から

首位ア、や、とんします

A. 古泉千樵氏(改造文庫川のぼり三頁) 遠

○ひえく、とさ雨務しみふる、停車場んわの降り立下ゆ、暖は

実相直入の境地に近いのと思ひます。

○とししを消してあゆめは、明近く白く大きく、雨務動く人、

前の歌、大なるもの、ま、たい水伏す作者の、敬意を心か見え

△雨務晴、木立の上ん、すぢの富士は大きく、夜は明けんけり

今迄云つて来た、アオロギの方面には、アア有るいは、湖の方面は、アア

してゐるやうだ

△山頂にたなびく雲の一片は垂氷の如くか、うてあるか、

垂氷の如くと、なつた口けで、いづく感觸、か、うすめら木、割合に、新しきやい

歌にあり

△富士の雪は、はらりし、雪片、うへ、大戸を、なして、は、立、こ、り、けり

前へ同じ

B. 斎藤茨吉氏(改造文庫朝の霞七六頁)

△日の光班、も、う、ら、悲、し、山、登、は、未、小、さ、り、けり

茨吉の歌は、は、た、え、な、の、か、あ、る、一、思、い、一、面、心、と、思、ふ、こ、の、う、ら、悲、し、は、母、の、死、ん

あ、い、て、の、そ、れ、何、れ、も、登、り、の、事、を、必、然、性、を、せ、け、ん、云、ひ、出、し、て、の、そ、れ、と、知、ん、は

非常、手、藝、か、か、り、

○花、舞、り、通、す、か、人、の、舞、は、け、つ、一、舞、り、通、へ、ん、ち、り、ん、け、ら、ず、や

絶唱、一、夜、し、の、ま、は、み、の、歌、で、あ、る、

○お、ま、な、草、口、あ、か、ん、ほ、く、野、の、通、り、流、水、こ、れ、水、ら、行、き、つ、し

前、の、歌、に、同、じ、境、地、を、同、じ、感、じ、て、唱、つ、て、あ、る、其、の、潜、辞、を、惜、ま、ぬ

首、う、な、わ、れ、ん、作、者、の、姿、を、の、ま、の、歌、に、あ、る、

△わか母を、暖か、ゆ、は、な、ら、ぬ、火、を、持、こ、り、天、つ、空、ん、は、久、し、の、し、を、し

前、三、首、に、比、ま、は、る、余、裕、を、足、せ、て、あ、る、か、ら、む、ら、い

○母、の、あ、る、一、夜、空、の、下、ん、赤、と、は、い、そ、の、母、は、然、え、ゆ、ま、ん、けり

一、讀、心、と、打、つ、歌、で、あ、る、恐、ろ、く、永、久、に、残、る、歌、に、あ、ら、う、空、歌、の、中、ん、い、え

ま、る、主、観、の、強、さ、を、見、よ

C. 木下利玄氏(改造文庫立春三四頁)

○木のたの音の梢をえん上りなりその花の音かすかにするし  
 ぶい歌の思ひます。ぶい歌はアウ、キタのたのたのの海の辺りなして感んま  
 ます。

○向ふ山の大きな斜面かしては百合咲いてはるかなるかも  
 利玄の詞の使ひ方が自由その特徴です。大まかなのは口語です。さして  
 ちつともかかひならぬらぬのを感じします。この歌もい、歌でけい、まの切つ  
 てつげんやを気がしなすもなりのかたはります。

○山の下 湖のすくそばに灯をとほしこの村の空はあうそ（了）  
 くれも 利玄の特徴をよく表した歌です。第五句の通当さんおのうかたれま  
 〇夕川のなむの雲を渡る床の息をひそめてあれ立ちんけり  
 こんを歌アう、かと一寸も相違がないうるせう。要はさる同いものです。  
 い二歌を思ひます。只一寸感心か（培きすれおどろか）にいらむんも思ふ。

△生一本の夜と日とつめて山河のたむちのとみといまうぬか  
 こは 利玄の弱兵三表してす。源の長所である詞の自由さが、短所  
 ともなつてゐるのちす。二句以下の長長さん対し口語併半法音と假音  
 こそ有してゐるものも持て来るのはたしかに失敗です。

○浮川は雨にさらすく小竹の青ま色すれ百尺の下  
 田圃子んめづらしい、空を歌歌をのびすかやけりこの特長の細い趣味を  
 出しておます。百尺の下がそれです。切角空景をまわくと画を、出してま  
 ちからなむれり、百尺の下をんてそんけをい句ともつて来んのせう。

病癪 ニうく入るとももえなませうか  
 ○月の暮の明星の獄の山風んたれ葉れし悪んかた

相かはずすその弱きをまはしてみりけれもまがら、歌の中をせうね  
 かしこふ歌は今のプロ短歌歌からは一層眼まするものかし、たれ葉れし二  
 ひんとは遊戯的だると僕でせぬたくなりませう

△涙をばうけんと思ふおまましたりいとおさましや水晶の盃  
 一寸もけららぬ歌です。三句の主語が盃の主人か、品子なるか、故んわつらま  
 たりませう。あさましやも厭ふす。擬人をして法はもう過ちてい、はすす  
 △此茶花咲く小か心より上りたる煙の如きうす色として  
 此人をさる人達は佛蘭西の歌詩のおもひかかあると、田舎を度するをさる、こ  
 ころ二の涙を眺するをせふ、大体、歌のこのも感懐のあしい表現と見えてる  
 二私んこは嬉しいもなほなき、（品子らるまよ）但し、歌の詩は、色を  
 て、明んあかた、古らうや

村杖の鳥のこまけり、移の暮、を、  
 一、座の所に白く咲きたる、梅の花、鬼貫、  
 なるは雲の生の極致、詩の極致のあま歌でほんとうの、歌や詩、句は、皆この域  
 に入つてゐるから、それは別です。

又佛蘭西の歌詩としての、うんめやん、その、短歌の歌詩も、一、厭ふは、さしいかし  
 と、は、詩、を、から、ゆ、さ、う、ま、元、長、も、欠、迷、し、な、り、短、三、十、一、字、の、中、へ、二、知、り、な、う  
 たり、如、く、似、て、い、て、を、使、つ、て、や、つ、て、来、ら、る、こ、の、な、は、な、い、の、で、す。  
 や、ま、あ、ま、歌、詩、と、し、な、り、な、い、能、句、や、歌、の、あ、ら、は、れ、な、い、空、歌、の、中、へ、あ、ら、は、す、法、の  
 いらしもの、を、思、ひ、ま、す。

E. 空田空穂氏（改造文庫、擬の本、七〇頁）  
 △過むはは始、忘れこせ、る、身、の、忘、れ、草、の、花、咲、ま、ん、け、り  
 わ、す、れ、草、の、此、ま、ん、か、一、見、の、人、な、ら、ば、し、忘、れ、草、の、花、咲、ま、ん、け、り、日、の、影、

19

このまはたままん

△このまを今更にはくしとすまらねどとみずあははしくしし身は

くゆくうつるゝあゝの如く せん強の感懐をさそめて 狂も薄く南よりのまじ

歌目

○園の上の並木の 楚若風 暗ま支とちうてみん

四句如女しつやむれはむらむら 楚若風はゆく風とみの方か

いと思ひます

△春の風吹きや 過ぎゆく来り 青ま支のこゝんは 花つる

場界を想出せしめるとは一寸は つかかか、や、こゝの歌の方であ

○人いれぬ 鹿園の園の春の草青く 花もつる

実相直入し 或いは作者は 実相歌 作つてのめしれなき

F. 工政善 菅氏 (改定文庫 室を仰ぐ 八三頁)

○暖の支しるめ 数張の中鳥 絶えぬはあわの女を

い、歌おげれど 夕し 余 緒の欠えるのは

○なまからを 甘藷の上ん 長々と 一時に 流あふ小ま

同所

△数張あつていんを 机に入水せて 病を母が 焚く香のさびしき

わがうんくろ 歌をす

△英三郎をおとげりいもいひます ちりし 甥か 扇りたる 猿田彦の面

ニ本は 説明す。 二人なるを 説き するといひの 珠の歌の

△なまけものといふ 一振の ちりたるし 甥か 扇りたる 面のよくみせ

後のスミミ下ニ本も 話なすて 何とかいふやうか ありん

G. 中村富吉氏 (改定文庫 松の芽 一一四頁)

○おほしく 見ふくを見ふし 眼の前の 大き向日葵 花はゆすべす

実相観入の歌 目まそそのものをまねしてのみすす

△目まそ 影するの 深淵は 目まはりの 大輪の花 け 吹まへり

立脚の歌に くらと なる。 迫る力が ない

○あかしく 大目まはりの 下ん 立ち 息が 深ま くる

○くもり 大の 四辺を まげば いまはりの 花ん どの 山 蜂の あと

い、しらしい、歌とす。 目まはりの 大目まはりの 深ま くる

△ちまろ 下り 咲いて 流木なり 目まはりの 深ま くる

此の 歌も 宜しき ちから 幾分は 心を 惹かぬが 潤へ ぬい ぬい

つ 迫る 力が ない

次の 頁の 二首も 宜しい、歌とす。

秋来 (十三首、中)

藪の後に頭を洗ふ水、洗みて冷やし秋、入水しなり  
園境の青峰の上なる雲の白く眼のゆゑ、秋に入れるなり  
雑草生いしケラレロ、一杯の秋陽の下に、友らあり  
久々に手に取り、球の重さを軽み投ぐ水は、漂ふ秋陽光の中を  
唐黍の赤毛垂れ出づ、ゆるゆるその毛動かし、風走もち  
吾等の打ちし直、球は大空の支の中へ消えへけるかし  
遠方を電車の通ふ音、まじり、弱水の中へ消えぬ  
コナリ曲りし、夏の白レヤツの光、閃めき、われん近づく  
110 里芋の大き葉の上の葉脈の作れる陰影は、遠いところし  
四九三

光の中へあるもの (四九五)

〇 赤い星

船に乗つてゐるのです  
夜、泣き出しさうな空です  
そして—  
その空のどっかん雲の穴があつて  
そこから星が—赤い、まつかを—  
覗いてゐるのです  
波ん支が映つてゐるのです

22  
そしてたら、何白せんは、どうしますか  
君自身は、なぞ？、それかわからず、からきいてゐるのですよ

夕栗の花

坂道を登る時  
道傍の栗の花を  
杖をさぐつたら、白つた  
坂道を歸る時  
栗の花は、夕首のしめつぽい白く、  
ひとり、白つた

〇 道

星のまわい、を、晩でした  
稗林を通つてゐる、  
稗の葉の向から、く、星が、まつてました  
長い、稗林です、  
だから、お星様、  
「今夜は、あ、今夜は」  
此の、後、移か、いつまでも、つ、く、のです

僕は、退屈し、思ひ、あ、を、しました、何と、失礼な  
禮儀、深い、お星様、達は、挨拶、と、止、怒、つ、様、を、支、を、送、つ、ま、ました  
「十、万、も、あ、さん、な、から、ゆ、と、ふ、つ、る、聲、も、し、ました  
僕は、自棄、に、な、す、ぞ

「それ、道、も、長い、から、ね」と、ふ、つ、て、や、り、ま、した  
〇 道  
の、い、ば、ら、の、や、お、ん、  
の、い、ば、ら、の、は、の、  
あ、を、ま、い、かり、ね

ていぶしの觸角は青かりま

ていぶしは　いふいみま

―<sup>あけ</sup>何のこなるも

固は止せにま

◇月夜風

月のあふ

ふるぬすのサ陸と

女の子が泣いてゐるよ

青い友か

葉のまを漏れて

女の子の<sup>髪</sup>頂か

白かつるよ

風か吹いて通つたよ

ぶらぶらすの葉を

さうく鳴らして―

女の子はおや

あなかつるよ

◇夜雨勢

白々と夜の雨勢流水

雨勢中人散草まきや

川の辺の柳わらわ病葉ひらひら散れり

草高い何とお話し漸やん々ん遠し

物音は 止みぬ夜雨勢は消えぬ夏と柳の下かたむへと今いまも寝いねて

◇空辺にて (四九七)

空から舞ませ跳とりて

遠い山があるのです

山の上には直ぐ白を雲か

つてもたつてゐるのです  
人間の生なまかたもさういふしみ／＼と考かんへらゆくのひす

空から覗くと

夜空に星がひらくのです

星の群集した銀河あまのなほは

南云の直角なぐさくをサかして

宇宙を支たかす巨きなものを感じるので

空辺に坐つてようま

向ふの道と赤い日午かあま通とほ

並木の肉をりえりく小するのです

午の持金のまきかけからいけいけと

白アの心の動きを感じるので

◇時 (四九八)

かたしかたしかたしかたしかたしかたし

長き夏の日を

をきつけしひらのこゑは早やまりぬ

まじの外を 平木の葉 ゆるいん  
青空を 小鳥 かなよん

こころは  
ひらりしを 去りし

はた

〇かすかなるもの (四九九)

曠野を 歩みぬ

幽かなる 生命を

息のかき 歌ふ

ゆ木 近アケバ

歌は 止みぬ

存 怪しみぬ

ゆ木も 亦

幽かなる 生命の 現け木なれば

夕暮の 野の上

白々と 煙立ち

風吹く 播く 草むかよ

煙の 申し

知くし やす

あまの 雲 等ぬて  
あまの 雲 追ふ

〇短唱

一

こころしつむ あまのものは  
すくまほんで 目ん 走る

二

ふかい 空の  
様か 眼のや

三

晴れぬ 山には 程遠し  
せめて 埜の 木すき  
銀の 穂先の 色

秋草 (四九九)

116

はろくに 山菜花 つぼみつけいぬ 此の 朝々の 平木の 雲を  
はろくに 山菜花 つぼみつけいぬ 此の 朝々の 平木の 雲を  
菫の 花 咲き出るぬ 此の 朝の 雲を 思ふて けがれつ

かまめ (四九一〇)

夕暮の しいまの 申をつばく 池面を ぬたり 南の 雲を  
しるく とつばく 池面を ぬたり 南の 雲を ぬたり  
ゆくの 池面を ぬたり 南の 雲を ぬたり 南の 雲を ぬたり  
かまめ ぬたり 南の 雲を ぬたり 南の 雲を ぬたり



与謝宣が画せし屏風を置けり  
屏風なる俳仙の教の尊きに  
見の果けり、なほも久てある  
(伊々藤百宅ニテ)

七鳥 (四九一一)

男からおのゝたすけの時のかしの  
空にんもわをぬたり  
おほ空こそし世評(一) 七鳥は  
みほいたまはくたまてのそ  
またせむりけり  
羽うらゝの自まこんひは  
大空をけゆゝむかす  
舞ひるなりけり  
八重雲のおのの持つる  
彩の田んこつらやら  
あゝんや

(四) 高天原の白

ほのぼのと野をささげにけり  
立ち立す武庫の山脈や  
一草百木とす (四九一一)

校庭 (四九一一)

人のるめテニスコートに  
かけおとしテニスネットは  
張らねりけり  
ヒマラヤ杉のこまかく  
ゆるり豊彩の下水道の水  
たえおこほ  
木の蔭の水道端に  
痰壺のいくつも並び  
水入(一) あり  
たえおかつる水道のしづく  
痰壺と(一) 水の面ゆる  
かす  
こほくく英字とを  
くりし合敵の本の本  
おれへ一花残り  
なり

二重虹 (四九一一)

二重虹立ちあがりけり  
その下は白壁の家  
照らぬなりけり  
二重虹空にあらけり  
夾竹桃木梢に花  
か咲き残りぬなり

大空の目まぐるし立ち  
こる二重虹は  
はらまきこころ  
壁照しけり

夏球 (四九一一)

外野田におお  
うの香来風  
わたり  
あみおれ  
そを  
あよりん  
山の隙の空の青  
ま白たまの夏球  
かりりて  
なめとかりけり  
(旅寝塚球場)

迫り力 (四九一七)

窓から見ると南の空のは  
てに  
天の河が美しい  
瀧となつて  
流水落ちぬる

(あ、今夜もお  
おらうが  
そいであ  
ま)  
天の河を形成し  
我億の  
寝支体は  
気おほしく  
切なく  
息つき  
くしてぬる

(あ、星が  
おれん  
ん)

天の河の所々には  
豊里を  
あめ  
あつて  
無気味を  
静けさを  
見湛(こる)

(水夫達は  
石炭炭と  
呼おせ  
るを)  
向いよ  
存在  
むらり

遠くから  
迫り力  
おそぬる  
此の  
雲集は  
(あ、僕  
はわ  
おけ  
る人  
内心)

お  
おら  
うが  
ゆるり  
ゆるり  
銀河の  
あつたま  
あひも  
気おほしく  
あつて

(恐らく  
永久ん  
さうな  
永久に)  
息苦しく  
なつて  
来た  
窓を  
しめぬ

此の圧力に耐へることは不可能だ

(硝子戸紙には一やけえつるふ息づいて)

巻 (四九一三)

十八日私は無鉄砲にも善女と一寸した口論の末汽車賃はややこの金を持つて定かるといふ出しままで大段(来ました)

勿論行先の目撃者のないのです。何となく大段(来ました)所々を歩いたかたなりかした大段(来ました)私は(否)もう汽車が相程をすまう(取)からずの(した)か)今更(自)分の無分別な気がついて後悔しました

今日の大段の街は心の中(画)いて来たものとは違つて思ひ(づ)いみじけな(街)した。しかしそれと云つてあの冷酷な父の許(帰)りの(も)せし(厭)が(した) (またその(帰)りの(汽)車(賃)せ(ない)のです)

私は私の一人の大段(来ました)知人の住居を(う)ろく(と)控(ま)しました。それはあの(停)車場(近)くの(車)庫(街)に(あ)りました。一(つ)つ(小)木(柵)子(の)つ(いた)半(は)淡(れ)た(や)うな(家)石(した)。二(つ)つ(小)木(柵)子(の)つ(いた)半(は)淡(れ)た(や)うな(家)石(した)。

薄暗い土間に入り(と)汚い子供が(三)四人(一)度(を)能(出)して(来)ました(と)して(口)々(ん)お(か)み(さ)ん(と)呼(び)こ(え)て(立)つ(て)の(を)し(た)。お(か)み(さ)ん(が)出(て)ま(ま)し(た)。随(分)困(つ)つ(て)あ(り)ました(と)見(え)て(私)は(お)口(の)や(う)な(着)物(を)着(て)あ(ま)し(た)

お(か)み(さ)ん(は)併(し)下(宿)に(来)ま(さ)る(を)聞(く)た(の)す(て)宅(は)使(方)帰(つ)て(来)ま(さ)る(さ)い)と(云)つ(て)小(木)柵(子)を(し)た。私は又(明)る(外)の(通)り(出)日(暮)ま(す)の(数)時(間)を(見)知(ら)ぬ(人)内(か)り(か)知(ら)う(く)して(あ)る(心)算(掃)す(ち)を(散)失(し)ま(し)た。す(て)か(泣)ま(な)い(や)う(な)心(地)石(した)。

併し(り)方(な)る(と)通(る)電(燈)が(つ)き(出)し(け)め(と)何(と)も(な)い(ぬ)寂(し)さ(に)お(こ)す(け)て(私)は(あ)の(み)じ(め)な(ゆ)か(こ)ろ(を)あ(り)ま(し)た

再(び)訪(小)木(柵)子(の)家(に)は(も)う(一)人(の)健(次)夫(人)が(帰)つ(て)あ(り)て(小)木(柵)子(も)牛(鋸)を(用)意(し)て(こ)ら(て)あ(り)ま(し)た。私(は)や(か)ま(し)の(子)供(等)と(一)し(ん)そ(わ)を(聞)ん(で)

久(し)振(る)昔(は)か(ば)ら(ぬ)健(次)夫(の)声(を)聞(き)ま(し)た。し(か)し(そ)の(親)の(か)め(つ)た(こ)と(は)一(一)郎(志)ま(ん)今(只)三(く)さ(く)一

健(次)夫(は)私(の)話(を)要(所)く(て)う(ろ)ろ(と)ま(な)か(ら)ま(つ)て(来)ま(し)た。と(して)貴(方)の(つ)ら(い)こ(と)は(な)い(ぬ)か(ら)あ(る)け(れ)た(も)せ(の)中(は)さ(う)し(た)も(つ)た(と)一

行(き)も(同)じ(も)う(と)一(度)又(抱)つ(て)家(へ)帰(り)な(さ)い(と)懇(願)を(こ)ら(て)く(れ)ま(し)た。私(は)そ(の)藏(意)の(あ)ら(ぬ)言(葉)人(何)の(理)屈(も)い(へ)な(く)あ(る)を(う)ま(し)ま(し)た

帰(り)の(汽)車(賃)の(事)を(話)す(と)健(次)夫(は)実(は)私(も)今(職)を(失)つ(て)困(つ)つ(て)あ(り)る。お(か)み(さ)ん(は)金(も)無(く)あ(る)を(毎)日(自)職(を)控(ま)して(歩)つ(て)の(と)と(云)つ(て)カ(ん)

く(ら)い(難(し)ま(し)た(が)翌(朝)朝(晩)と(眼)を(覚)した(私)の(杖)許(は)あ(い)ま(に)置(つ)て(あ)つ(て)健(次)夫(は)もう(一)就(職)口(を)探(し)出(て)行(き)ま(し)た。

お(か)み(さ)ん(は)お(礼)を(述)べ(健)次(さん(は)何(も)帰(ら)ぬ(何(も)か)申(上)げ(ま)す(と)傳(言)し(て)去(ら)れ(し)して(私)は(格)田(行)の(電)車(に)の(り)ま(し)た。お(か)み(さ)ん(は)あ(い)ま(に)置(つ)て

と(財)布(か)み(の)あ(の)お(金)を(入)れた(財)布(が)私(は)此(の)財(布)内(大)地(が)あ(り)込(み)あ(る)心(地)が(し)ま(し)た。

車(庫)内(を)色(々)々(ゆ)け(を)話(し)て(下)して(も)う(い)れ(し)や(と)健(次)夫(人)の(家)へ(一)つ(通)し(ま)し(た)一(か)し(や)う(確)に(私)が(持)つ(出)た(の)を(し)た

から(く)と(一)つ(通)し(ま)し(た)外(へ)出(た)私(は)郵(便)局(へ)行(き)ま(し)た。何(も)し(た)か(ら)家(へ)電(報)を(打)ち(思)つ(た)の(を)す(て)そ(し)て(報)信(紙)を(送)つ(た)と(ま)その(電)報

を(打)つ(金)も(な)い(に)氣(が)つ(ま)し(た)。もう(一)つ(健)次(さん(は)も(死)命(を)か(け)た(く)な(い)と(思)つ(た)。

またお金を借る電報を打つてどうもあの冷酷な善女が果して一文の金も  
送つてくれない程内泊した

私は郵便紙を握りしめたままさまよひ出ました。いくら歩いても知らぬ人が向の  
から亡くなった親友のNに似た学生のまゝのには生かしてました

何故か知らぬか話して見たりしてのやうな気がして私は「君、君と  
呼掛けて何屋もくしりやうから愛情を打明けました。激しい恥かきと腹二重

かゝりわいて来たのをすか口はそんなにかまはさずとくしやうとゆきました  
長く熱心な私はしやうとゆきました。そしてその答は「言葉と気地のなす男かゆ」の

言ひました。彼は後にも振向かすのて去りました。私はかつとすとすと後を追ひ  
ました。彼はそれを知りていやうに急ぎ足で道へ向かひ雨に人倉庫

のやうな道へ曲るゆきました。  
私は彼へ追付くも一歩頼みましたがやがて返す水もものは傲慢な言葉でした

私は思はず拳を捲上げました。彼は「ドロドロ」といふ音をからりく逃げ出  
しました。私はいく夢中なうそ彼へおひかり引わり倒しました。彼のおけつとか

ら財布がばみ出してあました。私はそれへ目かきまると半ばお中び括ひ一歩へ  
逃げてしまひました。

私がいんちん肉なるうたのはこの時からです。で  
今もこの人ぬい対し深く憎悪を抱いておます。或は得手平勝平のみも

しんすんか

道(四九一四)

澄み徹つた空がまはまて

と水よりも更な濃い山脈についでとろろまで

此の道はついでにこのだ

秋陽に照らされたりするつ白き道だ

この道に沿つて流れる水は

壁のこころ／＼には甘薄かしり

その白の穂を端爽とさびかしてゐる

こゝに私は秋の風脚の白さを感ずる

道の片側には上履屋があり

とろ／＼の秋の草叢は

も／＼紅い蕾をつけてゐる

で能石の上は

北月の青此糸に支る蜥蜴が

長々と陽を浴びてゐる

白の柵から出た鳥の葉が

美しい空の本細工となつてゐる

私は此の夜をも見すて、

進まねばならぬ

二所方の青い青い空と

山脈まで此の道がついてゐるからだ

道がだん／＼何くなくて

川の面は近くなつた

山原花菫をいともそのおん

まおからんぼか

すいそで能ひはなれた

花菫の穂かいつまひも

ゆら／＼ゆれておる

その根本の水に

やどかおて

まもなく出た世の中の

とんちんかちを苗分みてる

(苗分を見つけたらあまらにも醜い次女をけんむ)

白々と陽光にえちな此の道、真中に

雄く馬書系がこぼれておる

その大膽士はな馬まをから

隣せとほよとまその中に

こかねむしの脚をまぎいた

あ、何とも、どこにも

生命を陽光のあふれ此の道を

いつまで、どこまで私は歩まぬばならぬのな、う

己の身生命のほのなせとあじまなををたし私には

あまらにもつ耐へかたし此の道、たのには

此の陽光と生命をみちをた道、たのには

大段風物詩

一

まひる日の友の中に

泥にひらり水ゆたいたゆたひ

蠟舟の行燈もカフエの電燈も

白日の陽に見れば儂な

濁り水も通々快速艇の

立てた波は

蠟舟の船腹を

ひた／＼と打つて

一断向うに消えたその艇の

とん／＼と鼓動する

エエかんのまむかいまもも総えぬ

河山をめぐつて

並に立つ料理屋の三階上は

もの、中の三味のまぶか

いつまでも、いつまでも

もの、皆の饅頭をたしとろう

産類の堀をええおは

泥濁り水

かにかくに悲しきものは

白濁りの道頓堀

(四九一九)

飛行機 (四九二二)

飛行機のフロアの窓をたたくとわが見上るに宙返(うしろ)り  
秋空はすみとほりたりで飛行機のとこへ高さを低く思へぬ

大及風物詩 (HYSK君に呈す)

二

昔え立つ五重の塔の

秀木(ひめぎ)の空は青々と晴れたる

何すもばあまたの人

此の舗道(ひだり)を歩きの

道傍(みちのべ)に並み坐したる

本(ほん)書師(し)の列は

白(しろ)髪(かみ)の乞(こ)食(じ)に似て

わが去(さ)の、わが愛(あい)し子の

戒名(かいな)書(か)す田(と)刀(た)女の

眼(め)に涙(なみだ)をま

又(また)数(かず)多(た)のわが店(みせ)ありて

軍(い)物(ぶつ)新(あらた)刀(た)の響(こゑ) 玩具(おもちゃ)

菓(か)子(こ) 及(およ)びあつとあつと

安(やす)値(ぢ)のもの並(なら)べた

御(ご)堂(だ)には誦(よ)経(ぎょう)の音(ね)え

有(あ)難(がた)ま伽(が)羅(ら)次(じ)香(か)の香(か)

堂(どう)外(がい)の人(ひと)群(ぐん)ん及(およ)び小(こ)い

本(ほん)尊(そん)の御(ご)眼(め)に今(いま)負(お)けの相(あ)あ

はた人(ひと)混(ま)雑(ざつ)に

道(みち)子(こ)ありの札(しやく)立ちて

わがままの頼(たの)思(し)くさるまで

泣(な)けいしなけい

いつまでも答(こた)へ人(ひと)なく

白(しろ)髪(かみ)の老(おい)死(し)哀(あは)れと吐(つ)くさる

日(ひ)毎(まい)は豆(まめ)食(じ)ひ飽(あ)かず

人(ひと)の手(て)へ飛(と)び来(き)る鳩(と)の群(ぐん)

白(しろ)と中(ちゆう)堂(だう)の屋(や)根(ね)にまましる

また更(さら)に怪(あや)しきは

占(うら)師(し)の身(み)負(お)しまあ

人(ひと)毎(まい)の宿(しゆく)世(せ)説(せつ)く書(か)き賣(う)ると

声(こゑ)をわけて説(せつ)けを

その思(し)ひ及(およ)び酒(さけ)の香(か)にも

長(なが)実(み)のこを幼(こ)の耳(みみ)にたあけた

かしのは怪(あや)しげの布(ぬ)張(は)りし中(ちゆう)

宿(しゆく)縁(えん)めきたる化(か)相(さう)の

春(はる)虫(むし)く口(くち)をまき婦(むす)女の

黄(わう)毛(もう)声(こゑ)して説(せつ)け

はた支(し)那(な)人(ひと)の手(て)口(くち)使(つか)ひ

自(みづか)り口(くち)より蛇(へび)の頭(あたま)尾(お)出し

二(ふた)つおの舌(した)赤(あか)くと

流したうへにて遊ば

長々とついでた

又不可思議の菩薩華鏡

視界一面に化しき姿 (表三郎の面を真の馬のうなり)

まひの日の中へおひかりおひ

面鏡の中の影のあし注のむこ

まは面のおもしろくに人々ひまふ

あ、かくもこの青まか下

安髪油と体の真

ひたふらへえちたところこ、

人々は驚いたよ幼げなまか

妝のあらうところこ、

(たまたまに豊めきたる女がまは  
之目にてしか世は手を空のひたり)

真実には下界の心地こそすん

淫禁と金銀欲と嘘言と

おほふその罪にみちぢたは

かゝる時塔の九輪の光

おほなる白衣のものをたて

まのつみのことは叫ぶと久えて

はた消えた

さてはまた一群の女邪鬼地の土をゆまか

一即態鷹眼の掬

人の身あすかまいた

人のみえを足彦手早ん

めいま

(あやしみにみちたところ)

あやしみにみちたところ

彼岸会云の天まき



(四、九、二四)

首の域行 (四、九、二三)

疲れまて見し眼に青を松虫草この日向に暖ま乱れをり

赤々と曼珠沙華咲く(四、九、二二) いまふつくくあんなりの道か

夕蔭の蜜柑畑に空を蜜柑また青くして葉とまむれたり

平らな畑たわにる木々青蜜柑こま表皮は支合(四、九、二一)

山の中の細溪川の山岸おほひ胡蝶花の原葉はむらあふれり

向う屋の斜面をおほ小橋の若木茂み深めて青波をるす

稚橋しげりしげ木々林中の道のくらきに水流んたり

こたして眼下に底まかむまびのうゆひ松山田中に立こり

百十山とませし頂はるくし雲浅く陽照りいよ、はるかそ

近つへの黒山の彼方山頂の草山に照し雲も木陽の光も

田の中を今まし道の白々とますくにまるとはくつくく見入中

楠の茂りも深ま神の杜々木々らのみけり神のままし水

かむまびのかみのみまの楠の葉を陰のみし、まし水かもし

はるくくと冬を(四、九、二〇)あか見ゆる人全剛山を雲がまひたり

この道は今はい高みにまるとりし谷のりま三日月のやとほむか

秋の夕に尾をたおめたつ高原。秋のころに泣かまくしとり  
 下田が不ぼふうすもわの中長々と支りかたの石が流る  
 直ぐ暗き榊林を歩くと主人殺さむとひそかに思ひ  
 青栗のいがりまき通りの道のてりりのはまをたけけり  
 栗の樹のこぼく、穂とそめる枝に一房残る栗の白く化  
 山頂の草を中細々と人通ひまぬ道りついでけり  
 蛇は友の杖先尾振ううやいば滑りて穴はかく木をり  
 つか小まきと山のふもとに（り見）かづら山はり雲霧うらむせり  
 高原の秋の風情に浸る時松虫草に蛇あたりけり

同行村山高氏如部大人 幸宮清見大人 小林百三君  
 豊田久男君 増田百三君

曇珠汝華（四九二六）  
 士ともまふな花の色  
 貞実まをこめれば  
 士ともあやしき花の色  
 轉死女の傷の色

二

赤々と秋草花のほく野道  
 眩暈を感してあゝいた天、僕は  
 いふ誰かひんを時杖許へ  
 嘆いてゐた花がたつたことと息を  
 眠をつつてよあいなけい  
 眠の裏にまじるとの赤さがしみこみだつたよ

三

子供は死人花と呼ぶ  
 夢してそのサレの世で  
 首飾をいれ

カリーヤ （四九二六）  
 天竺牡丹と咲いて  
 さて眺めよ  
 ゆうやくゆめをみた花がたつたよ

フスモスの垣 (四九二九)

フスモスの花 垣の中  
はまのゝて

垣の外を這つた

まよひな 女の子のつた

女の子の頬には

フスモスの色か 映そめた

(フスモスの色か 映そめた)

二人は 志をこころたつた

攀葛城山而作歌四首並反歌 (四九二九)

空晴の 秋の一日を 吾友と 集ひい群れて 攀葛城山に 攀らま

河内國の 野の道をはるく 来れば 路の辺に 曼以華咲き 垣内は

稀は空より 羨しと 思ひて歩みは 足引の 山路に入りぬ 溪川の 流を渡

り 奥深き 林を過りて 久方の 天の久未橋 登り立ち 遠見放くれば

近つ辺の 黒山の 彼方 頂の 草原に 廻り 雲霞陽 見の 尊くて 流

流れま

反歌  
葛木の山を登りて 攀りて 頂の 日下り 仰せ 見放せし  
金色の大日の光 頂の 草原に 仰せ 見放せし

久未橋を 後へのこして 我等行く 道は 高き 登り 清谷川の 水

音は 聞えず 道の 辺の 草原の上は 是か 花 尾花の おもく

吹まみ 空の 光を 仰ぐ 風を 吹ま渡り 風の 穂先に

さうくと 御音ま 靡かぬ 秋の気 満ちに満ちた人 青空の 高さを仰せ  
白雲の 白まへ 嘆き 種々の 花の 姿を 目も 離れず 眺めては 心  
たぬしも

反歌

高向原の 秋の 風吹き 甘藷穂の 白まを ながし 流水ゆく 見ゆ

長々し 道は 巨木は 頂も 並内 近たなりぬ 藤木たる 見そふりて 山名かゆ

の 二つと 道は 踏み平し 峻しき 攀り 葛木山の 頂に 青ま

てし 見れば ちなちは 大和 大野は 久方の 雨筋云の 立ち 敵火山 かすか

見えど 三語つふ 三輪の 神山 巻向の 輪原も 見えぬ 河内野は もや

立ち 二めて 茅渚の 海 漁り 舟の かすかに 見出すも なく 丹竹の 曲

方 神山 金剛も 雲立ち 流る ちやちしの 雲

反歌

千早橋の 神の 心か 二つして 國見を すれば 雲立ち 隠くす

あつたの ちかく 淡み 山岐の 道と 下りて 夕暮の 大和の 國に 降り

立ち 振り 仰せ 見れば 葛木の 山の 頂は 是か 雨筋の せり 草

根 旅の 情は 身は ぬかき 金本屏の 花の 香に 思ひて 思ふ 是の 故

郷を

こゝに して 心か ちし 夕暮の 金本屏の かほり みちたり



曼珠華 (四一〇三)

昔の花のまんなゆさけ  
今も此れ ~~昔~~ 咲きまを  
わか幼友ついで来下

曼珠華は華折りよの色に  
幼まこゝを思ふお目の  
心いなしと告げて来下

こすもすの花に (四一〇三)

こすもすよ 二すもすよ

ありなしの直のこゝろが

おま(の中)のこゝろおて

わたしのむねをしめつけた

おも(ば)純な子供たつたよ 私ハ

あや花垣のなはらうを

とほろすまをたあのもの ~~顔~~ 顔

一目で見えてしまったのたつたよ

とんけけたるを そんけけたるを

木犀の香 (四一〇一五)

もくせい(の)香(の)す(と)あ(の)見(る)に本(の)思(は)土(に)花(を)ち(り)し(け)り  
もくせいの香(の)す(と)あ(の)見(る)に本(の)思(は)土(に)花(を)ち(り)し(け)り  
もくせいの香(の)す(と)あ(の)見(る)に本(の)思(は)土(に)花(を)ち(り)し(け)り

信太山ニ秋季演習 (四一〇一三)

なみす、ま穂に生じてけり、高原の果の山脈雲をひく見ゆ  
高原の果の山辺に生じてけり、高原の果の山脈雲をひく見ゆ  
芒穂の穂穂の上に風ゆたりなむ穂先は紅を合めり  
唐辛の細葉が木に赤ま葉はみよりた水花いまたもさける  
熟水くし黄金稲田の畦畑に思草の葉のゆわりのしるしも  
つぶかしの村の家々白々と壁友を見えわわら倦みたり  
松林の朝のしめりのすかしもふ木の下の世に草ひそみり、  
夕のあかりのさう長し薄根上のみる雨水白々と見ゆ  
朝明り未だも白し各向の池のこの面のほり明く見ゆ

菊賣 (四一〇一八)

手(の)末(端)につめたさ感じ止まきわて菊賣人(に)合(ひ)にけ(る)かま  
の籠(に)入(れ)し菊(の)花(株)濃(緑)の葉(の)上(に)し(る)ま朝(の)露(路)かま

月影 (四一〇一八)

月(か)の映(り)冷(し)木(の)枝(動)か(さ)ず(し)ま(り)あ(る)も  
露(の)ひ(り)冷(き)瓦(屋)根(に)立(ち)望(遠)鏡(に)月(を)見(こ)も  
月(め)の光(の)女(こ)ろ(く)と(お)を(遠)鏡(に)う(り)更(け)ぬ(此)夜(は)  
向(い)家(の)屋(根)の(露)霜(相)さ(は)な(ら)し(こ)月(か)け(に)ぬ(木)く(こ)見(ゆ)  
満(月)の(空)に(照)れ(ば)生(駒)山(や)ま(り)輪(廓)の(明)ら(に)見(ゆ)  
満(月)の(光)寒(し)と(見)ぬ(時)屍(を)焼(く)臭(ひ)通(ひ)来(ぬ)

村端の死人燈場に立つ煙 此の月空に流れておけぬ  
 月影の明るま今宵月ものゆはらとこの虫の鳴きまをみる  
 明星の光痛しとこの夜をとおしてゆきは寝ぬにけるか  
 望遠鏡とともてなすにながむれば日耶を才古連星はし  
 かぬの連珠の如くあらぬの星をばあせし人魂の色に似たり  
 さてあまはばらんの子のまはらにころりまほしとまをなかむるとまとな  
 りちのくのいといの(に)いと立つとまはらぬ。あかしともあかし。あやしと  
 ちめし。まこれか、うたもまきまはらにしてちまはあめたよまころりま。

望遠鏡 (四一〇・二三)

銀のたまのみすまは日耶はし 東の空にころりのゆかり  
 すゆる目を古く連るとこの秋の澄めのみ空にのほりけるか  
 人のこの木木の東をみけるこますはる。ほしは昇りたりけり  
 生駒の北の傾斜にかたけの月はと真赤くか、りけるか  
 邪事のま(の)しらせと紅ま月山のなま(に)おたりけるか  
 高空にあんいろめたりまあ、あめの夜露のいまつまはらし  
 人肉の測りり果の遠さすまわもものまこのまは  
 あかしあかし東の空に照る星の色に情執る

望遠鏡とともてなすにながむれば日耶を才古連星はし  
 かぬの連珠の如くあらぬの星をばあせし人魂の色に似たり  
 さてあまはばらんの子のまはらにころりまほしとまをなかむるとまとな  
 りちのくのいといの(に)いと立つとまはらぬ。あかしともあかし。あやしと  
 ちめし。まこれか、うたもまきまはらにしてちまはあめたよまころりま。

雲の動き (四一〇・二六)  
 霧のせうトラク口措しと目をとこりか見の空に雲行き早し(対南大戦)  
 魚座の賦 (四一〇・二四)

冷々と秋の気が人の身に返り  
 白揚の木が葉を落しそめるころ  
 空の南にかりのほ  
 北の魚星をるある  
 光の薄い星の集り仰ぐ  
 水の美しい池の底  
 秋の葉の葉の散らたまつた中を  
 北の色のくすくす、いるか  
 肉く、小い魚を思はしめる。  
 その池は山の奥にあつて  
 平常は人の来ない寂しい池だ  
 けれど、見ろ 東の空を  
 血の様に赤い月が登らしてあつたらう  
 彼こそはひとり一人の此の池の訪向者  
 人も悲しいことには  
 人に慣れないこの魚達は  
 彼が近く(来たとき)には  
 一匹の草葉の堆積の中へ  
 一匹づつ姿を隠してゆくのだ。

月は青い顔をして  
池を廻り

好意を裏切らなれど、心寂しき  
顔を引きつめて去る

さうして彼の足音を消したとき  
又もやう魚達は

ほつりほつりと夜を照らすのた  
可哀想な魚達

月には永久に孤独を  
魚達は永久に愚かである

~~空はかの大空に  
さうした悲しさがみちたのを  
よみてこそ~~

焚火 (四〇・三二)

湿り深き此の夕暮を赤々と焚火もやして人あたりけり

仄々き空に羽虫の飛交(る)此の夕暮に火はもえあたり

焚火燃す人こしく背まゐてたま火は独りもえあたりけり

長塚節の土を讀みて感あり作

(四二・三)

母さん 母さん

烟の隅 青い陶器の壺の中

母さん 母さん

烟の隅 黄代胡蝶子の木の根もと

母さん 母さん

壺の中 心みの細根が垂下

母さん 母さん

私の 白い帷子朽ちました

母さん 母さん

私を 心みの細根が吸ひ取れた

母さん 母さん

心みの花 青く咲いたを清浄にか

二すしす (四二・四)

二すしすのたの盛日すおたり 花のよまを徒妹は挿す

おと秋の空の冷々ニすしすの花はよまを挿すにけり

記念録の人 出ろみはうさう 校庭にほけりあまは木のけり (高橋三三)

川霧 (四二八)

川霧はたかくのほらう地にはひて赤きましのゆへて行くま  
まら這(る)この浅宵を人行かざりもしひ一つ遠くある見ゆ  
街中をまき低くはひ文小まき 姫か二人もたしよまけり  
あうな二人もしひまげて我がま(を)さらはひやくと心いきのほ  
わかま(を)まよく姫をぬかしし上げた(を)もしにたらされにけり  
姫二人後となりけり 何(ぞ)のまきにかく外てものまひにけり  
ころ柿ぢぢまはやめて 藪ま去りか(ら)みすまはとしゆへぬ  
老嫗らのよみあやふし提灯のひかりのゆれはつゆさたまらず

幽之庭 (四二八)

南天本のくまに つまじしうたの かずあびたいし なほあそよ、  
なんてんにける 白刃 おほとらわして目(を) (し)かばとが子(を)まをり  
やむあくて殺す親だにをあひもてはちげばつちにあちてま目せず  
まにおさてまた動かざりしうたの あやしみ 取(り)こしめつ  
白だにの卵か(ら)うて生れ出づ(る)子だにの数はいかたせあ(と)ぞ

々

わか庭のしめあきの樹に実れ果の赤まをめで、この日(こ)う 紅  
止柿としれ、あかしかまの屋の色にんはあとき(に)うづのぼる。  
枝先になん柿のみとらむとしはしためらぬ 赤人のこころも  
木の下にしかかきとんひのしゆに口ゆかめた木つひにひつくす  
口中のかまの赤みはばるはたし柿のあまはに唾ましはしはす。

々

二ぬかあのとありの煙低くはひ棟欄の半内にはひまつは水り。  
あまじゆり煙早らさず隣家の乾き臭やく香は二、まで来る。  
層内の港 (四二二、二五)

南雲伝記を讀みてわか心は神文のま(を)たらし南をふも  
ろ(を)ま(を)ていづくを南の詩をま(を)のひあ  
ゆへは懐か、南の層内の港  
真夏白の光溢木た(る)ころ  
白ま家々並ひたす  
石壁に緑波ひた(る)追  
あ、層内  
ひかりの港  
南の港  
港端木の磯辺には  
世にもあえかす紅ま花白ま花  
彩々に咲き乱れ珍らま  
伽留羅の島致(る)こ  
あ、層内  
南の港  
あ、層内

さ(を)また夜(の)空には  
黒々と寄来(る)大濤の上  
かすかにも夜(の)虫(の)ひかりにま(を)た  
こ(の)時(を)水(や)  
鐘樓の上  
黒まの神文 熱ま情に  
よ(を)な(る)ま(を)、わかま(を)す(す)のま(を)み(し)し  
と禮拝す  
あ、層内  
か(の)み(の)み(を)と  
み(の)み(の)み(を)と  
あ(の)ゆ(を)す(ま)ま(を)を(れ)水(は)  
海(に)向(へ)る(空(を)こ(と)く(南(ま)  
空(を)と(は)て(せ)る(ま(を)の(ゆ(ひ(つ(、  
う(た)の(ゆ(を)え(を)し(ら)ぬ  
空(を)と(は)な(る)龍(の)中(に)  
羽(を)ま(し)ま(お)く(あ(島(の)神(を)  
緑(色)の(海(風(を)や(く(と(吹(ま(す(ま(を)り  
あ、層内

二のりみきと

南のみきと

わかれ又想ふか街の

家の壁毎に這ふ

縹紅草の紅まはたの

かきしさを

かゝして ありあか ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~

ふりてくは ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~

あ、あま

かきしさを

あか ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~

あま ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~

曲馬團の歌 (四二・一六)

(道化、たよす)

松竹座に ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ のくちすを ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ を見よ

さあすの場ちり まつそ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 作つた ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ もの

こゝなるは ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 曲馬團

宇宙の果から ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ まで

旅して ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 曲馬團

至る所 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ は ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~

さあす ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 入り ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ みて ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ おあへり

さても一燈の形は

銀鞍白馬の王子様

あへての女子に ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ や ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ や ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ した

「道理」の ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ わ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ま ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ の ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 永 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 久 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ なる ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 若 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ さ

さあす ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 入り ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ほん ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 二 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ み ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ さ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 小

さても ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 一 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 燈 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ の ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 女 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 王 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 様 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ は

「道理」の ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 帽子 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ に ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 緑 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ の ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 上 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 衣

「さあす ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 入り ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ の ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ は ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 正 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 装 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ の ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 正 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 装

一 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 脈 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 在 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ( ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 正 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 装 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ )

常 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ し ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ( ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 正 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 装 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ) ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ の ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 詩 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 詞 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~

さあす ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 入り ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ み ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 小 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ お ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ へ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 入

「道理」の ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 王子 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ の ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 手 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 下 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ と ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ な ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ づ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ け

曲 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 乘 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 曲 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 藝 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ いろ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ さま ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ さま ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ の

枝 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ を ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 見 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ せ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ば ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 正 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 装 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ の ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 二

お ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ころ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ と ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 正 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 装 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ の ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 右 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 者 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 達 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ よ

哲 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 学 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 二 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 組 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ じ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ なる

さあす ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ いろ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ いろ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ は ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 正 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 装 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ば ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ の ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ま ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ り

さあす ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 踊 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 木 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ や ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ お ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ いら ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 子 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 達 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ よ

青 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ の ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 上 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 衣 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ に ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ いろ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 紅 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ つ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ けて

靴 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ 音 ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ の ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ いろ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ く ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ り ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ お ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ の ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ だ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ん ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ ~~かゝる~~ す

おのれおのれや 踊子達よ  
 青い上はにちのちのするは  
 深き男の子の 熱<sup>なま</sup>情<sup>じやう</sup>の生<sup>なま</sup>下  
 何をくよくよ 踊子達よ  
 かち田村とわか木を惜<sup>おぼ</sup>みや  
 山の鳥か啼<sup>な</sup>くさうな

おのれおのれよ 踊子達よ  
 色<sup>いろ</sup>のおのれよ 「音<sup>ね</sup>」のおのれよ  
 「色<sup>いろ</sup>」のおのれよ 「音<sup>ね</sup>」のおのれよ  
 「色<sup>いろ</sup>」のおのれよ 「音<sup>ね</sup>」のおのれよ  
 靴音<sup>くつね</sup>かろくおのれおのれ

さてさて一座の御見物魚水  
 下手を踊<sup>おど</sup>るお飽<sup>あ</sup>まかごさうや  
 おのれおのれや 廻<sup>まわ</sup>り本馬  
 まけりまはておめ、かま(か  
 お降りなすお下、そりやそ(か  
 お前様らうの 運<sup>うん</sup>命<sup>めい</sup>のまうか

のらしや木のらしやれ 廻<sup>まわ</sup>り本馬  
 運<sup>うん</sup>命<sup>めい</sup>の本馬 神妙<sup>しんめう</sup>不思議<sup>ふしぎ</sup>の

さて今夜の入り無<sup>な</sup>す

運<sup>うん</sup>命<sup>めい</sup>のあらはし怖<sup>おそ</sup>いと  
 眞<sup>ま</sup>理<sup>り</sup>のあらはれいよこの  
 詩<sup>うた</sup>ももはれに乃<sup>の</sup>まぬ

やや木不入<sup>きふり</sup>の曲馬<sup>まが</sup>團<sup>だん</sup>  
 入りかきけはせし酒<sup>さけ</sup>  
 縁<sup>ゆかり</sup>切<sup>き</sup>すもえんや  
 まつまつ休<sup>やす</sup>まう、ゆくとひ木た

晩秋の回<sup>ま</sup>り(四二・一五)

雨<sup>あめ</sup>降りて雲<sup>くも</sup>くしそ木<sup>き</sup>に庭<sup>にわ</sup>隅<sup>ぐも</sup>の楓<sup>かえで</sup>もみぢぢあか知らぬ内に  
 朝<sup>あさ</sup>をど雲<sup>くも</sup>しと思<sup>おも</sup>ひてあかをしは庭<sup>にわ</sup>すみのあ(で 紅葉<sup>もみぢ</sup>てあたり  
 にはすみにあ(でみわて居<sup>い</sup>たりけり 秋<sup>あき</sup>深<sup>ふか</sup>しとをわたりまの我<sup>われ</sup>  
 枝<sup>えだ</sup>の白<sup>しろ</sup>きた(で雨<sup>あめ</sup>降<sup>ふ</sup>るに白<sup>しろ</sup>い今<sup>いま</sup>の秋<sup>あき</sup>もまたゆめあすとす  
 ひらうちの上<sup>うへ</sup> 枝<sup>えだ</sup>実<sup>み</sup>とをらしつえには白<sup>しろ</sup>き花<sup>はな</sup>実<sup>み</sup>ままた散<sup>ち</sup>らうとす  
 所<sup>ところ</sup>を忘<sup>わす</sup>れまきは昇<sup>のぼ</sup>りてあまつた(で太陽<sup>たいやう</sup>の面<sup>おもて</sup>をか木<sup>き</sup>あふるなり  
 云<sup>い</sup>傳<sup>でん</sup>の朝<sup>あさ</sup>日の走<sup>は</sup>りする(に見<sup>み</sup>木<sup>き</sup>は流<sup>なが</sup>らぬ空<sup>そら</sup>の高<sup>たか</sup>雨<sup>あめ</sup>初<sup>はつ</sup>  
 あかしあ(で並<sup>なら</sup>木<sup>き</sup>色<sup>いろ</sup>つきはらうくとひまかト鳴<sup>な</sup>りて葉<sup>は</sup>末<sup>すえ</sup>を落<sup>お</sup>すなり  
 あ(しあ(で落<sup>お</sup>葉<sup>は</sup>しと降<sup>ふ</sup>る(で中<sup>なか</sup>を白<sup>しろ</sup>馬<sup>ば</sup>車<sup>ぐるま</sup>のうて人<sup>ひと</sup>来<sup>き</sup>たり

噫<sup>あ</sup>森<sup>もり</sup>博<sup>ひろ</sup>元<sup>げん</sup>君<sup>きみ</sup> (四二・一八)

森<sup>もり</sup>博<sup>ひろ</sup>元<sup>げん</sup>君<sup>きみ</sup> 高<sup>たか</sup>弁<sup>べん</sup>の人<sup>ひと</sup> 野<sup>の</sup>球<sup>きう</sup>部<sup>ぶ</sup>部<sup>ぶ</sup>長<sup>ちやう</sup>と左<sup>さ</sup>羽<sup>う</sup>翼<sup>よく</sup>を守<sup>まも</sup>り討<sup>う</sup>ち  
 打<sup>う</sup>二<sup>に</sup>本<sup>ほん</sup>を放<sup>はな</sup>す勝<sup>かち</sup>因<sup>いん</sup>を作<sup>つく</sup>りたり 君<sup>きみ</sup>は資<sup>すけ</sup>性<sup>じやう</sup>淳<sup>じゆん</sup>朴<sup>ぼく</sup>純<sup>じゆん</sup>情<sup>じやう</sup>の人<sup>ひと</sup>とを後<sup>のち</sup>  
 輩<sup>はい</sup>を懐<sup>なつか</sup>しと馬<sup>ば</sup>く君<sup>きみ</sup>が勸<sup>すす</sup>誘<sup>ゆう</sup>し入り部<sup>ぶ</sup>と余<sup>あま</sup>の如<sup>ごと</sup>し高<sup>たか</sup>弁<sup>べん</sup>君<sup>きみ</sup>の理<sup>り</sup>解<sup>かい</sup>と  
 回<sup>まわ</sup>り情<sup>じやう</sup>に慰<sup>なぐさ</sup>めよと委<sup>まか</sup>す負<sup>お</sup>の職<sup>しやく</sup>に居<sup>い</sup>るを得<sup>え</sup>たり 對<sup>たい</sup>校<sup>がう</sup>試<sup>し</sup>合<sup>がう</sup>初<sup>はつ</sup>廻<sup>まわ</sup>り  
 胸<sup>むね</sup>部<sup>ぶ</sup>に疼<sup>いた</sup>痛<sup>いた</sup>む感じ一時<sup>いちじ</sup>帰<sup>かへ</sup>室<sup>しつ</sup>して加<sup>か</sup>療<sup>りやう</sup>し 對<sup>たい</sup>校<sup>がう</sup>試<sup>し</sup>合<sup>がう</sup>を  
 對<sup>たい</sup>校<sup>がう</sup>試<sup>し</sup>合<sup>がう</sup>には平日<sup>へいじつ</sup>の如<sup>ごと</sup>く元<sup>げん</sup>氣<sup>き</sup>と活<sup>かつ</sup>躍<sup>やく</sup>したり 夏<sup>なつ</sup>休<sup>やす</sup>み初<sup>はつ</sup>に再<sup>また</sup>再<sup>また</sup>再<sup>また</sup>  
 と死<sup>し</sup>したるもの、如<sup>ごと</sup>く又<sup>また</sup>全<sup>ぜん</sup>快<sup>かい</sup>の後<sup>のち</sup>ニ早<sup>はや</sup>期<sup>き</sup>開<sup>ひら</sup>始<sup>はつ</sup>と若<sup>わか</sup>に再<sup>また</sup>死<sup>し</sup>しに悲<sup>かな</sup>報<sup>ほう</sup>  
 の原因<sup>げんいん</sup>を尋<sup>たず</sup>ねたりは豆<sup>まめ</sup>草<sup>くさ</sup>の等<sup>らう</sup>と傷<sup>いた</sup>れ所<sup>ところ</sup>に心<sup>こころ</sup>に思<sup>おも</sup>ひたり所<sup>ところ</sup>あり  
 君<sup>きみ</sup>の性<sup>じやう</sup>思<sup>し</sup>粗<sup>ろ</sup>放<sup>はな</sup>す、其<sup>その</sup>の念<sup>ねん</sup>氣<sup>き</sup>に念<sup>ねん</sup>は一致<sup>いちじ</sup>し得<sup>え</sup>たりものやしか如<sup>ごと</sup>く高<sup>たか</sup>或<sup>ある</sup>は精<sup>せい</sup>  
 神<sup>しん</sup>的<sup>てき</sup>強<sup>きやう</sup>肉<sup>にく</sup>牙<sup>が</sup>常<sup>じやう</sup>と念<sup>ねん</sup>と一<sup>いつ</sup>に野<sup>の</sup>球<sup>きう</sup>部<sup>ぶ</sup>のめはしと得<sup>え</sup>たりと世<sup>よ</sup>に苦<sup>くる</sup>しみ人<sup>ひと</sup>に謝<sup>あやま</sup>り

あなま、今見て見よ。君が遊戯す又は外野を準備し、生々、隙の我等の言の  
不考を、是も君をして、病の餌となす一原因ならんか。併し、君  
は、心ならずも、悲しませ、常に愉快に気持す、我等を、導き、  
か罵言を、知らず、ものなく一人の叱責を受けしものなり。我等はこの春風の如  
人格に甘し、所無まやと、南を、深く、懺悔するものなり。本林君、我等の  
兄に對する態度には、他他の許すべからざる、真か、ありし、おぼろ、世、  
受けて、居た、兄、ほん、この、親しみ、を、以て、語、事、の、出来、を見、又、筆、を、以て  
敬、け、した、兄、兄の、義、地、の、思、出、は、永久に、我等の、胸、中、に、居、る、る、  
眞、世、不、悟、せ、よ。併し、この、我等、の、え、え、え、え、見、の、死、した、ら、て、め、ま、  
誠、に、信、不、として、信、じ、得、わ、る、を、悲、し、鳴、呼、本林君、本林君、  
得、べ、くん、は、今、一、度、生、を、還、つ、て、ま、し、箱、一、君、は、死、ぬ、は、余、り、に、惜、し、  
ま、し、ま、心の、持、ち、を、し、本林君、君、は、ほん、この、口、死、んだ、の、は、な、い、の、は、な、い、か、  
僕、大、か、高、く、悲、し、ま、る、を、見、て、お、の、の、を、何、から、か、本林君、本林君、  
君、の、面、目、は、今、ま、は、つ、ま、し、す、お、て、る、本林君、本林君、あ、し、え、が、  
ひ、ま、ら、な、乱、れ、も、乱、れ、ま、る、の、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

悼 森博元君 (四二二七、二八、九)

丹波やまとはつらなりて、いらが、な、し、森博元は、今、お、ら、す、け、り、  
何、し、か、も、は、る、ま、け、し、ま、京、の、街、夜、更、を、り、お、て、君、在、ま、さ、ぬ、に、  
方、の、み、の、思、ひ、の、御、顔、に、あ、し、れ、日、の、君、か、お、も、か、け、か、あ、(ま、も、の、と、(指、前、に、)

(君が) 棺の 前、に、お、か、つ、ま、ま、を、お、つ、つ、な、み、た、ら、ん、て、お、せ、せ、ら、あ、と、す  
雨、の、悲、嘆、お、も、ほ、え、わ、か、流、れ、ん、と、あ、と、す、本、隠、さ、し、(し、や

君かみちの、け、り、を、林、の、ま、ま、を、た、思、つ、流、に、あ、れ、は、た、し、た、と、み、か、て、ま  
何、し、か、も、わ、れ、は、ま、に、け、れ、み、極、に、の、れ、る、学、帽、た、え、て、な、か、め、え、ぬ  
あ、る、時、は、あ、か、手、に、觸、れ、し、帽、極、の、上、に、ま、ま、お、の、外、た、り  
学、帽、の、像、ま、車、の、え、ま、ま、を、お、い、た、流、れ、る、水、の、下、に、お、の、い、は、な、く、  
本林博元、今、は、あ、ら、ず、の、嗚、言、を、ま、ま、た、此、の、目、で、み、た、か、か、な、し、  
君、か、か、ら、た、ひ、つ、お、の、甲、に、入、り、た、本、死、と、入、れ、る、と、わ、か、し、は、な、く、  
いと、こ、子、を、共、に、た、ま、ひ、し、ま、お、の、な、げ、き、人、の、子、わ、れ、や、い、か、で、み、す、  
銀、田、(の、道、の、暗、さ、し、み、り、み、と、お、の、い、の、ま、を、二、は、し、み、に、け、り、(國、行、氏、を、訪、れ、  
比、叡、の、山、に、つ、ら、な、る、の、ま、ま、と、ま、し、お、の、み、か、ら、な、し、と、な、た、い、は、み、ず  
曉、の、蒼、は、空、を、し、君、か、棺、極、車、に、し、り、今、ま、ま、と、す、(靈、極、を、見、送、り、  
い、つ、そ、の、の、君、か、か、ら、た、は、此、の、行、に、お、た、い、び、み、ま、ら、お、た、か、て、め、か、れ  
す、こ、や、か、に、あ、り、し、君、を、ん、や、こ、の、ち、さ、き、極、の、中、に、い、ま、は、お、ま、ま、り、つ  
い、つ、し、か、に、お、も、れ、て、も、(や、お、そ、お、ま、の、上、身、の、街、中、に、一、雨、望、極、自、動、車、の、い、ま、  
お、も、お、も、こ、空、は、低、し、も、二、お、の、の、君、か、車、に、お、に、け、ら、ず、や  
君、か、お、も、ら、る、燃、す、と、お、と、二、う、鳥、山、山、け、ら、る、の、ち、は、み、の、な、(め、や、も  
今、日、は、な、い、お、み、す、お、お、女、踏、行、く、君、か、車、に、似、た、一、雨、望、極、車、を  
こ、の、降、り、京、の、ち、また、を、行、ま、し、か、お、お、お、ま、ま、ら、に、山、若、花、を、み、り、(川、腸、氏、を、訪、れ、  
つ、た、の、上、に、ま、し、ら、に、つ、ら、う、ら、若、花、は、お、な、し、ま、は、な、と、み、て、す、お、に、け、り  
雲、の、ゆ、き、南、に、疾、し、幻、に、お、ま、み、か、す、か、た、お、み、え、に、け、ら、ず、や、(活、雨、に、て、)  
か、く、の、み、に、あ、り、け、る、も、の、を、友、も、わ、れ、も、人、知、り、は、て、は、お、た、ら、お、り、し、か  
す、ま、ま、は、は、い、け、に、け、り、な、い、と、み、す、の、あ、い、し、お、ゆ、い、は、い、ま、か、き、あ、の、よ  
ま、ま、は、お、た、ら、日、お、し、つ、め、た、し、と、な、こ、  
白、き、日、に、眼、君、か、影、の、た、と、こ、の、は、す、あ、ら、げ、ま、た、ら、





冬来 (四・二・三七)

友よ手を握りあそび眠らう

せめて残つたわたくしをまわりの離れ去らなうと

君は手を握るをよとよと死をさけうと思ふの

此の世はもと頼むものな

友よ、よこまでよはまのふく木たま (そしてこまかく)

手を握りあそび眠らうはなつか (木林の死後却負の人とあそぶ)

二

冬は野にきて

菊の花弁を摘ました

女は襟巻をまいて

首の玉ををかくす

僕は黄色い顔をして

夜更の苦学を(見)

三

夏は雨(難くして)

戸外を止むのは

収穫の時(静まり)

人々よく稲を扱ふ

他人の働けるを見ては

わが心内りたる甲斐の腑

再山 寝き始ちり

ぢ、懶惰の血は

わが体内に遍し

東山 (四・二・三二)

いよいよはらうの電車の電線に垂れ東山に到る

知恩院の大きき高麗ふり加服の下にあふれいよ、巨きくし見ゆ

清水の重衣杉山の蔭斜面羊歯の瑞葉はおほひ茂れり

東山のなま(一帯を羊歯の大葉おほひ下りて道に迫り

茅葺の木は白くなれり杉山も雨霽れらんと道に迫り

眼下の谷と埋ちるもみぢはの下ひの道を人行くおそす(清水)

や、にして人は見えたりもみぢ葉の下ひの道にふまひあらぬ

清水の音羽の瀧の音はふけんかひを傳ひおつる細水

紅葉の下流にすすき濃きもみぢしつみて勢おほき流動せず

雨霽は二の杉山の杉幹にしづくをりて光りなれり

冬来 (四・二・三八)

夕暮のや庭に立ちて梧桐の柱はをもちやしんして

蒼梧のか木葉柄はもりの時音をたむなりかすけまものか

あをむくの枯葉の焚火けあり立ち白きんくの枝にまつはる

山茶花は夕の間にさなななり風おちた木やさゆらおもせず

山茶花の白花のもつ明るさは此の夕庭に君臨しぬ

21: 初冬のこの会ひのさ中より鳥一つ出で視野を横おくり  
陽の光あまゆきみさの白ひかりくもの糸ひとつ見えて消えたり  
夕空はなごみにけりな 櫻欄の木の葉かいた見ゆる身見影りさる

憤怒 (四一ニ七)

本官清見君を理事トしやうと推したるが宣傳の下手し 文二甲の  
不遜心の爲に二三の対老を大敗した。 踊子(原野)を理事としたの  
は本校の二爲にも非ざるべし 仕方かない。 比喩が本官をいふ  
をいのかめいのだ。

30: 朝庭のいひらむ苗に見入りおてこの静せと 死なむとむ思ふ  
都(ま)會(かい)の(あ)い(い)音(ね) 田舎の(あ)い(い)の(あ)い(い)に(あ)い(い)て(あ)い(い)何(なに)か(か)お(お)ま(ま)い(い)心(こ)に(に)き(き)し  
またの(あ)い(い)と(と)大(だい)ま(ま) 壓(お)力(りき)と(と)迫(お)る(る)ま(ま)め(め)此(こ)の(あ)い(い)に(に)ま(ま)り(り)お(お)木(き)は  
都(ま)會(かい)の(あ)い(い)と(と)つ(つ)は(は)ら(ら)に(に)ま(ま)げ(げ)ば(ば)往(い)き(き)か(か)よ(よ)電(でん)車(くるま)の(あ)い(い)ま(ま)も(も)ま(ま)ら(ら)り  
またの(あ)い(い)お(お)た(た)え(え)ず(ず)い(い)ま(ま)て(て)つ(つ)ま(ま)わ(わ)と(と)ハ(ハ)角(かく)全(ぜん)盤(ばん)の(あ)い(い)を(を)見(み)つ(つ)め(め)る(る)も  
またの(あ)い(い)音(ね)耳(みみ)ま(ま)ま(ま)り(り)て(て)目(め)に(に)見(み)ゆる(る)粒(つぶ)苗(な)と(と)や(や)う(う)と(と)も(も)思(おも)ふ(ふ)  
大(だい)い(い)なる(る)心(こ)の(あ)い(い)耐(たい) (難(なん)く(く)活(か)か(か)花(は)の(あ)い(い) 香(か)を(を)嗅(か)ぐ(ぐ)も  
花(は)絶(た)えて(え)入(い)り(り)し(し)と(と)な(な)ま(ま)は(は)な(な)つ(つ)に(に)サ(サ)を(を)吐(は)く(く)も(も)怒(い)の(あ)い(い)仕(し)業(ぎやう)

友よ 非心しむな

うぶ牙の塔を出たのは

ゆへのためにとではなにか

昔又時な人胸にない已を尋ね

再びあの塔へ戻らうよ  
塔は月の光にゆれてゐる  
安息か、そこは待てゐる  
已を待はるこで  
又生か命と詩を語らうるばあいか

憶 (四十二十四)

21: 堀外の樹の赤き果は近づけば 葎すかしたる鳥丸の實

此の掘り大木の根元は  
子供の数年を過して  
私はよくの旅人を見た  
その中で且取忘れ難いのは  
破れ馬車を馳けらして  
光明の市いと彼はなまー  
去そ行つた彼  
私は子供心にも  
もしや彼の破れ馬車か  
支明への障壁となくはしまいかと  
短つたのだつた  
童心を失つた此頃の私は  
彼の破れ馬車か  
市へ行きま自分たか、どうかまひも  
疑々たるまつてまてゐる  
併し市までが荒野を  
車ものうすくて止みく彼  
或は心屈して途に「くま」彼  
と思ふは耐(難)いこはあ

小春の暖さ(四・一・二・一九)

五十一年に一度といふ今年の小春の暖さだ。その長きもあつた。ついで十一日の後から十三日の中迄またであつた。

十二日の初といふに此のゆくさたんぼぼの花を道にみつけたら(高師塚山) ままの木のゆくさにあつた豆の芽はついで来て来た。雨相に枯れると。

313 方々に櫻咲くとあつた。かきおそふ心にうらうかたがるも

山茶花 (四・一・二・三)

さいんくわの植込中のくろ土はあつたからにいよ、思しも

山茶花のつゆく水落したる花片はやくたされて黄に染まらぬる

山茶花は盛造むしかつもの(上女落てる花片かえそ満ちり

314 山茶花のふちはなむらむらみちて此の細路まふ人もあつた

三皇子と野火(四・一・三・四)

クワムカの枯野のまは赤々と野火をもやして三皇子あつたけり

赤々と野火のまはの麻非く後三皇子等叫びしたかへ見んや

あかくと野火は盛りになれりけりほろほろの中に三皇子等はあつた

三皇子等はあつたかみんつまに上をぬりて火を叩きぬる

322 野火清えぬ焚火のすゝも三皇子等は叩きおとして上をさ着てあつた

除夜(四・一・三・一)

ゆめあかり人三木の楠にしるじろと雲か、りぬて動かせる見や

ほろほろのともりぬて大年の夜空を叩きぬるたけり

おほいしう夜を海みて一つ星雲のまんまに照れしおぬし

327 朝(朝) 暁を思ひぬる夜をわほいしう夜空星雲を叩きぬるたけり

昭和五年 乙亥之一年 夫也二

新春吟行(五・一・一)

女と男に南和の九帝陵に参る。天は晴朗、暖かして新年

乙の土はまじりあつたり

神武天皇 畝傍山東北陵

神武の帝のみさか本を築み百千鳥(鳥)もあつたり

何の鳥のこもあつたり畏み畏み三みまう五日は礼拝す

経靖天皇 桃花鳥田園上陵

桑畑の傍(の)の道をゆましかば作おどろまじり立ちにけり

雀のこおどろまじり立ちと桑木の枝を移(ゆ)るのみは離れず

畝傍山山を低めて頂上社立てりか明らかに見んや

安寧天皇 畝傍山西南御陰井上陵

ほ二すむの立すは静しれ道の辺の安寧陵をみるのみまつ

懿德天皇 畝傍山南織波溪上陵

檀原神宮

身狭桃花鳥上陵 宣化天皇

みまゝにまゝにし帰す。其敷中に居せむとすははや柑子の實

めし竹の葉もえのゆきのひけきす高物そ負ひて女来りも

高木ます淡紅ら花は屋根のほにその淡紅花を落してあま

淡紅色の山茶花屋根にかけたまの屋根の傾斜を滑らあまの

淡紅色の山茶花をまの目見果る木ばあの下つへに南天の朱実

南天の朱実とはまは堀の外に垂れ出で道にのびるま

葛木の深山壁にまの煙こもるまのほらまの見ゆ

榎木とまの榎の林のまのまの久山見えゆなりけり

久方のまの香久山落葉せる林の彼方に見えて

孝え去皇御池島上後

陵の繁樹の隙の堀の水のわらにまの波立てる見ゆ

御み池の水にわらふ一つの水に見ゆ又一つ見ゆ

かいつゆり池にほまのこ水溜り遊べるまのこの場あま

舞は今しかげとまの姐道とまのくしとまの田の初めけり

や、くは雲はまの遠方の家の白壁まのまのまの

まのまの御池の水にわらふまのまのまのまの

まのまのまのまのまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまのまのまのまのまの

48 清防の山初をけり学校り、庭に白く水噴き騰り

此處の野は雲のまのまのまのまのまのまの

又武王皇松のまのまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまのまのまのまのまの

我が行手まのまのまのまのまのまのまの

御の道とまのまのまのまのまのまのまの

御明王皇梅隈坂合後

越の同皇の丘の我がまのまのまのまのまの

同官王皇の陵にまのまのまのまのまのまの

舍人草か波なまのまのまのまのまのまの

35 南の丘のまのまのまのまのまのまの

41 橋の本は葉村のまのまのまのまのまのまの

21 雪雲 (五、一、三) 於花園運動場

まのまのまのまのまのまのまのまのまの

大雪と地をまのまのまのまのまのまの

組雪まのまのまのまのまのまのまのまの

雪雲は低く下るまのまのまのまのまのまの

如雲のまのまのまのまのまのまのまのまの

その日、

まのまのまのまのまのまのまのまのまの

雪明り、まのまのまのまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまのまのまのまのまの

雪もつりしめしめはあつた奥草木し道(に雪釣つるるれ)  
 溶雪の水気昇りて此の宵の月は朧に白曇りたりけり (一月十日)  
 煙草の灰乃立ち鏡ヶ水やしうかぬの雪のち野に青條をさす (一月十日)

冬日かげ (五・一・三三)

鶏。二羽のかまき朝にして白水仙を南きたりけり  
 吾弟らと焚火もして水仙の二つ花咲ける雪しと見たり  
 朝日子のなみめに射せる水仙の二つたの色はささおしよ  
 野の上をつぐみおと心わたるとき高圧線をよぎらたりけり  
 高圧線の電柱のつらなうはくく野のはたて目絶えおちけり  
 冬野には草葉もちて多きはま遠くものはかがりにありけり

友真のししをかましよ (五・一・三三)

友よ野の高みに行きて角笛を吹くべし  
 伊は群々喚けり野いはらほ  
 度世子のほへえみを津に送らむ  
 子どもらよ晝顔候まめ、風出のん——ばせを

青い煙 (五・一・三五)

大雪が降つて野も道も一面に白く白く  
 下敷の歯に挟まり雪に苦しみながら  
 僕は道に迷ふ、そしてドキッとして立止る  
 一面の白土の中に二本はまた何と云ふ  
 生々とした青土ならう、あの煙が  
 僕はその青土に生命こそこの煙煙す、熱を感じ  
 わけもさく嬉しくて立ってゐたのである。

雪明り (五・一・三三)

雪の積つた夜は深く僕は空(の道と道)  
 その道の明りよ、一筋明り。  
 ええ、煙くそ遠くの村にまは僕が村に  
 待つまうと見える  
 冬から長い、知りぬか  
 その終るまは見えるのな

青い煙 (五・一・三六)

南の空にはオリオン星を來てゐる  
 参星の連の車面の方角を  
 屋根の棟と平行である  
 (そんなまはいつてもいい)

見ろオリオンの星雲を  
 青くく燃えたりもえちかうと水の白を

灼の色は奪たい青おけりし

戸妻かすの空を燃焼状態の青い灼るるを

僕が彼に天上の不平等を想ひ

星と占位して兵革を知つた古の支那人の心と

如実に感あるのである。

カーパス (五.一.一六)

南の地平線下の見えないう星

南極老人星カーパス。

僕を王冠まつけるをニホに若くばない

何故か、見えないうからだ

同じ理由で僕は毎夜棟樑樹下の

未だ見ぬ読者の顔と想ひ画くのである。

二叔 (五.三.三)

寂しき南天の宵は虫つゝあず

さかしてや丹波山越す雲のいろ

さかしてや山崎雨夜に満ちり (西園君がまて)

白々と道かまれば影がすいめ

青木村の宵は今日は根本に三つ葉草 (度々あり)

いしけ雲かよそ地もあけ

くらやみに流は見えゆ水の音 (五.三.八)

またまた死を思ふにつれ水けり

夢の白椿 (五.三.八)

ロシロフはき

葉隠りとして

咲きそ花

我が母の母の涙を思ふ

はりのみぶしに似たりとを思ふ

三 祖母の泣声

聞かぬ了幾年を

庭に咲けるは

白玉椿。

かあさんと呼べと

逆らふ

後影雨霧にわけて

行きたまふあり

三 祖母の影を

木にてゆきしかに

白く咲けるは

何の化せるも。

三 道の隈に

かたけけし

かたけけし

60 頭をかたけけし

一日夢に祖母を見よ 口のふきりてす

十数年 面影ははるあともいふにけり

夢のそのうちさうの昔のまんが本のうた

玉首

野火の下の下には (三.四)

青草の

早瀬えあひ、青ありけり。

早瀬の下、青草は

枯草に、野火成るるに

はな然、えそと田んぼ。

百舌鳥も病床に聞かぬ (一.二.二)

いたづらの床にいわたりか耳にもかはきニヤハ姿見えぬか

百舌鳥の三息高くさうさるわが庭の榎。木末に今の末ぬら

5 や、にして世に去りにけり ちすのニ思はるかにきこえやかてやみつも

百古鳥聲到床中

其姿不見 高或低

高而懷 在於庭樹

低者悲去我近

新各君も訪ねて不在すしあは

侍てるとき (五、二、一三)

久しゅうと歌をかたうと久しゅうに御面をかめとわはきたりし

もみちばのすむしかたうとまなむも君遊行しての(うませぬに

侍つししにあらぬまたの日ん心のこして今うはまかこらぬ

君の室へ 永島君の遺影を見る

まかしあし君とあらしここの葉はすんこまぬ君はあやみず

如人向のふりなしく 信濃の山の

雪ト入る 命をえけぬ涙ながるし

その子新各君(ら来り御誼す

月夜の 醉漢 (小林正三ト)

三。 彦北村にて野跡 却送別会をなす

月はてるとる。 街の上青い文の石をのみ

おひり踊ろと出て来たか足はもつれからなはほてる

月は三角街は坂 青い大気の海の中  
泳のわらしはつきあたる 女のまなおし 真珠の光

雪と山と (五、二、一)

天津の英雄叔父を訪ぬ 言腸炎きき

青そらに頂の雪かいふつは西方浄土尊しと思ふ

はろくと山のいたいま 遠くして雪は夫木く日は雲を渡り

いうつ日は山のかく木て山の隠ころを申す 煙たぢのけり

ゆのまらの山隠ころし頂につもる 雪はまどく木せりた

75 けすのゆくはたいにむかつる 武庫山り風はまらぬ此のうらみ

71 痛の叔父を助けて 風名に入れし けすのしたまをいたく感せしむ

増田而元 (五、二、一七)

菊池君にまく 彼は去る 空の送別会を泣き一筆を感

動せしめたと (菊池は信に似てといふ)

増田君

君は知つてゐたらう

純情は年と共に来りゆき Ego の涙は年毎に人へ伝へ入る

と人の云ふのを

今僕はこの空の 實験の証者として 再び君に思起すしめ

誠上君の有す 純情は美しく 愛すべし

例へば 冬樹の根に咲く水仙の花 似しむる

け木のも 僕はこの純情の花が 水仙の花の如く 時を水は潤ちるあらう

ことを期すを 彼せぬ

如に儘は断然一君に告げる。

君の純情をして、永久のものたらしめる

君の周囲の雑草はもういなくな

雑草を刈るは儘は引受けやい。(否) 汝の直任者はあまらうか?)

女池直る一君に別を告ぐ(五、三、一七)

もろもろのこと嘆きつゝ冬夜の夜にのみしころの平日は高かりき。

君ともたころのみのみつゝあなうけ(あ)のまはあはれ夜なりけむ。

陽夫さす道に立つ我をとうらし君の寫直は願像は本ざりき。

君ともたよみし道にコスモスの花げしをまむさふ木ぞ。

君といふ友もてうをなまけもの、吾のなまけをぬし誓からしむ。

寛らぬにわ木がたけをゆるしける人一人に誓ひのけんむとする。

心之自橋をよまて(五、三、一九)

小林・曲豆田と

自己嫌悪はけしき時にまちあまきわか身しはばらうか(う見つ)。

あかあかと陽の池あときわわかみとんあかきいとみたりけり。(大丸にて)

ゆのさゆりもをけちりおほ(一)街のまち陽はしつまふと下をあげ。(同)

映画の意も差決しくなりけりあかきわわかみは人をこかか。(明路屋)

しみじみとおのれをにくみあうときさむしきところの自橋の影は。

山にゆきて感ずるまのしさをゆりく人のせめまの中心にあてする。

かき舟ゆけあはは出てほのほろく川面にまぶさな夜となんとす。(我橋)

此のともりゆまかふつしを(て)サウリーマンとわ木はなるしき。

かかのみにかきしあしあしあゆみの木を街にゆきあよ電車のはえは。

SLOGAN OF FEMINISM

FEMINISTのBUS又ハ電車。於テ女性ニ席ヲ

こんべい

(FEMINIST) 顔面い助ハ絶エガん取張ニ硬直シテ本

(FEMINIST) ハ女ノ顔又ハ侍又ハ四股ヲ見ん(カラス)

(FEMINIST) 曰ク「何カフテコレニ女カヨクイイカ行ウ?

陽炎 (一)

陽炎 (一)

しあせと春をくなくを、さむく梅が咲いたといふ。反対にスキーの話を

するものもある。でも野原の土筆、ササの茎やけり儘の一香好ま

を甲子春のう気候にならぬ。もうすぐ試験かすめはと駒山から

甲(七もゆか)。(五、三、三三)

かおるの野原にいわての、果中を飛行機くを見まもつてゐる(一九)

飛行機はわかまつかうを五三ちうてつは土肉の(一)野原

あな、かきまよる三三のに出でてあかきのなまにづくし見まもつ。(三三)

このゆんせのりてのものと思ひしか土筆を見れば春去りけり。

96 方々に梅はまきけあはれもりまたおま野に出でて思(る)。

97 は二へは花をたむさぬいづんにかひがりこみてなく目となりぬ。

度石の苔には若しあさつばま

いづのせに椿の花はおさけり



WEISSER HOELLER (五三二)

毎天夜に此ノ映画ヲ見テ。從來ノ山嶽映画ノ中第一番  
好イモノガデス。成程雪山ノ峰上ノ雪ノ厚。夜ノ月ノ光  
カ雪山ノ埋メニ所。博チ死シテオハナドマサ人アヨイ。  
ソノ響キニSTORRYマンノキリセト思フワウ。ソノシテカ致モ

ソノ方面ノ出来事イ。出来事メモイ。

南風みねにまた木は峰の雪ゆいんつて雪山崩とるも。

ゆまな木といつたりてピフ。バリの斜面を下り人も殺すも。

Prichard. Paul'sの少年に照る月おしあし雲は流水の岸はくもるも。

たままはる其ま命のた(かた)くまし子にきは雪山崩ん死上物。

ゆまな木といつたりて仰ぐたまゆらはいのちしみかなしみはけ。

救助隊のたす炬火のゆるる炎をふもとの聖人々なか。

少年の火はつらなう。いままはるぼろし昨日も今日も人は帰らず。

しろかゆのつら(おき)る雪の洞に人はゆめり洞(い)の聖光。

106 雪ぬちたとほゆまりてか(いら)るひとのふろはもとめすもいし。

FEINHIMMELISCHES DRAMA (五三三)

此頃の星雲を眺むるとほんといんを動かして痛いやいな気がす。

天界一の明界(あ)る。んが星。そんに西のんは甲卯か。そにて二えの

(F) しまを想を練るを見た。

將軍は多は刃を女の胸に擬した。

彼の眼は赤く刃は蒼なり物を聚する利刃である。

俺は不敵を殺すその眼は語る。

女は苦しく身を顛はせ

やかに傍に倦たる涙が頬を打つ。

夫を殺し(あ)る。とあ。

死に(あ)せし。とあ。とあ。

去の背後に二男を認めし。

母は

あつ女の心は母かよみか(る)。とれを二通しての

を(の)欣む。

女は激しく体をゆすり不白とよ(る)。

二男かこころ(の)けて木(る)。女は手をふた。

乙も夫は無情である。とあ。とあ。とあ。

母と毒の首(あ)れを語る。

さうして二の後からは泣きながらうたいけを子供か追(あ)る。

二けつまるらつ。

か(る)して比(る)し(あ)れを去つた。—— 朧月夜となつた。

ORION座

SUBARU座 (Plejaden)

双星 GEMINI座

...



陽炎 (一)

(五.三.七)

到るところ椿の枝ト一杯に花咲く春となりけりかし。  
 巾加ふかにさゆりてさける。へらつばきしべの黄色はあざやけまかも。  
 へら椿一番はりの咲きたるは早やあすにけり青春のほと。  
 へらつばきさゆりつきたるはさるにおさとしみじみあつにけり。  
 雲ま間たまづ生まざらしめんむりりまた生みおしめ春となれは。  
 せ路の萱もよ雑草の芽も出んけり土をちかめて一時をくらす。  
 蟻梅は散らんけりよ。迎春梅は今とさめと咲まにたらずや。  
 南天の実は思ふみぬ梅の木も昔葉落しをぬみろはつきて。  
 15 けりぬ夜の本実つけたる木のさか前しらむまに。雲はさゆらすのぬ。

閑日庭を掃く

(五.三.一三)

庭の樹のこがふをわたるかせのあしたえはまきや唱をまもらせ。  
 木斛とかしのおすばをばあつ出常盤木をんが葉のいろを濃え。  
 煙空の掃除をせと屋根のけりいらぬの彼方にいこま山見ぬ。  
 かさかといのち生けらむ倉屋根の轉につくを昔昔のむと。  
 枝さきの夏みみの。雲、屋根におこわ水はもくやわふりは下。  
 此のあらはに木の高本のさくある今日とほしめて屋根のけり。  
 下ろはやはらに見ゆるかや屋根もあやの葉をばはを傷けつ。

落する将星 (二幕三場)

(五.三.一三)

The Time of Love for Love. (53.18)

Otome-na no yaasabiki Kotoba kowakintan  
 Kiyomoto Chimata ni ide-ni-ken-kan!  
 Tawakotaru Uta o tankuru mo Otomego no  
 Koko wa koruwa wa aware to ome!  
 Akanabiku Otome okedo yae-otoko  
 Ware ni koruwa Hito wa era-gu-mo!  
 Maniwo-stone Kagu wa yau-tani, Hi-tani dani  
 Ware wo omou ga naki-go sabiki!  
 Machi o yuki, Yama-kawa wa nagame  
 Sora wa nime-taki  
 Korikiki monoka Otome-go hitu!  
 Hana o nime no Otome o omoi, Uta o seikun,  
 Otome o omou Tawake-o ware wa!  
 Yakyakuni Koi-uta tankuru yae-otoko  
 Murakabi no Ware wa warai-tai-shika!  
 春 (五.三.一三)

春の風だ。みなみ風  
 どこかをさかかいて白くさる。  
 あく沈丁花 沈丁花  
 春の月だ。おぼろ月

どこかで何かの鳴りこぼる  
あゝ波の音 春の海

春の空はどよよと鳴る

どこかで何かの鳴りこぼる

あゝ波の音 春の海

春の山はどよよと鳴る

どこかで何かの鳴りこぼる

あゝ波の音 春の海

友下ん (五、三、二)

此の年月を夢みて来たり

一杯の酒の初まはる

一杯の酒の初まはる

昔かたはるが今私を苦しませておる

夢に 夢に人の心は

甘いほろかなりのあるのみまろ

私はいまでも不快を感じながら

今私の胸を充すは

いたすらな後悔である

私は遠く昔の人の語を聞きながら

又すくを金と有まんの夢を

実行にふたまい知るを

限らずく身しめる

私達人間 自分の愛を

他の中に見出すを常になす如く

あゝ波の音 春の海

あゝ波の音 春の海

大洋星 我見たる (五、三、一六)

即その領歌

廣松の 舞葉のはかひ一つ星

鏡ん光は空は空清かたし

春のほとり (五、三、二五)

妹の辛葉をのり 何れもと 長瀬川を遊ぶ

あまのさくらを木もまはるはにちあもわのはなをまきんけり

お川のあかりの相のあもれはあやけしとあみそとあめあつたけり

しねらうあゆみあはれはあもつてあゆりあつたけり

中身の古き建物の 中身の古き建物の

今を過すのちの花は白き鳥のときまふのしぬたりと思ひて眺ま。  
はるあまみ甚ままだあるこのしの本裸の枝に花は咲けり。  
川津田のた人ほのた人<sup>カフメ</sup>寝ぬる人としめのみあめて行けり。  
秋夜の垣根のふこもとほるとき<sup>カフメ</sup>花をみんとするその草を見んたり。  
まき鳥のこえ<sup>カフメ</sup>はしけし<sup>カフメ</sup>は<sup>カフメ</sup>二時<sup>カフメ</sup>なほ<sup>カフメ</sup>行ゆむとす。  
橋の上の流水も<sup>カフメ</sup>は<sup>カフメ</sup>水<sup>カフメ</sup>を<sup>カフメ</sup>せ<sup>カフメ</sup>よ<sup>カフメ</sup>底<sup>カフメ</sup>砂<sup>カフメ</sup>も<sup>カフメ</sup>見<sup>カフメ</sup>ゆ<sup>カフメ</sup>魚<sup>カフメ</sup>は<sup>カフメ</sup>あ<sup>カフメ</sup>ら<sup>カフメ</sup>け<sup>カフメ</sup>り。  
橋の上の流水も<sup>カフメ</sup>は<sup>カフメ</sup>水<sup>カフメ</sup>を<sup>カフメ</sup>せ<sup>カフメ</sup>よ<sup>カフメ</sup>底<sup>カフメ</sup>砂<sup>カフメ</sup>も<sup>カフメ</sup>見<sup>カフメ</sup>ゆ<sup>カフメ</sup>魚<sup>カフメ</sup>は<sup>カフメ</sup>あ<sup>カフメ</sup>ら<sup>カフメ</sup>け<sup>カフメ</sup>り。  
流水の<sup>カフメ</sup>は<sup>カフメ</sup>の<sup>カフメ</sup>池<sup>カフメ</sup>に<sup>カフメ</sup>す<sup>カフメ</sup>す<sup>カフメ</sup>陽<sup>カフメ</sup>の<sup>カフメ</sup>影<sup>カフメ</sup>に<sup>カフメ</sup>う<sup>カフメ</sup>り<sup>カフメ</sup>常<sup>カフメ</sup>に<sup>カフメ</sup>あ<sup>カフメ</sup>ら<sup>カフメ</sup>け<sup>カフメ</sup>り。  
~~流水の<sup>カフメ</sup>は<sup>カフメ</sup>の<sup>カフメ</sup>池<sup>カフメ</sup>に<sup>カフメ</sup>す<sup>カフメ</sup>す<sup>カフメ</sup>陽<sup>カフメ</sup>の<sup>カフメ</sup>影<sup>カフメ</sup>に<sup>カフメ</sup>う<sup>カフメ</sup>り<sup>カフメ</sup>常<sup>カフメ</sup>に<sup>カフメ</sup>あ<sup>カフメ</sup>ら<sup>カフメ</sup>け<sup>カフメ</sup>り。~~

萬本も<sup>カフメ</sup>二<sup>カフメ</sup>上<sup>カフメ</sup>山<sup>カフメ</sup>も<sup>カフメ</sup>の<sup>カフメ</sup>す<sup>カフメ</sup>み<sup>カフメ</sup>た<sup>カフメ</sup>水<sup>カフメ</sup>は<sup>カフメ</sup>な<sup>カフメ</sup>か<sup>カフメ</sup>水<sup>カフメ</sup>て<sup>カフメ</sup>西<sup>カフメ</sup>に<sup>カフメ</sup>ゆ<sup>カフメ</sup>く<sup>カフメ</sup>な<sup>カフメ</sup>り。  
山の上の<sup>カフメ</sup>二<sup>カフメ</sup>上<sup>カフメ</sup>山<sup>カフメ</sup>も<sup>カフメ</sup>の<sup>カフメ</sup>す<sup>カフメ</sup>み<sup>カフメ</sup>た<sup>カフメ</sup>水<sup>カフメ</sup>は<sup>カフメ</sup>な<sup>カフメ</sup>か<sup>カフメ</sup>水<sup>カフメ</sup>て<sup>カフメ</sup>西<sup>カフメ</sup>に<sup>カフメ</sup>ゆ<sup>カフメ</sup>く<sup>カフメ</sup>な<sup>カフメ</sup>り。  
~~山の上の<sup>カフメ</sup>二<sup>カフメ</sup>上<sup>カフメ</sup>山<sup>カフメ</sup>も<sup>カフメ</sup>の<sup>カフメ</sup>す<sup>カフメ</sup>み<sup>カフメ</sup>た<sup>カフメ</sup>水<sup>カフメ</sup>は<sup>カフメ</sup>な<sup>カフメ</sup>か<sup>カフメ</sup>水<sup>カフメ</sup>て<sup>カフメ</sup>西<sup>カフメ</sup>に<sup>カフメ</sup>ゆ<sup>カフメ</sup>く<sup>カフメ</sup>な<sup>カフメ</sup>り。~~

草を<sup>カフメ</sup>垣<sup>カフメ</sup>の<sup>カフメ</sup>草<sup>カフメ</sup>葉<sup>カフメ</sup>又<sup>カフメ</sup>の<sup>カフメ</sup>木<sup>カフメ</sup>の<sup>カフメ</sup>葉<sup>カフメ</sup>は<sup>カフメ</sup>熱<sup>カフメ</sup>水<sup>カフメ</sup>人<sup>カフメ</sup>と<sup>カフメ</sup>ら<sup>カフメ</sup>あ<sup>カフメ</sup>り<sup>カフメ</sup>て<sup>カフメ</sup>地<sup>カフメ</sup>ん<sup>カフメ</sup>お<sup>カフメ</sup>つ<sup>カフメ</sup>ら<sup>カフメ</sup>あ<sup>カフメ</sup>り。  
草を<sup>カフメ</sup>垣<sup>カフメ</sup>の<sup>カフメ</sup>草<sup>カフメ</sup>葉<sup>カフメ</sup>又<sup>カフメ</sup>の<sup>カフメ</sup>木<sup>カフメ</sup>の<sup>カフメ</sup>葉<sup>カフメ</sup>は<sup>カフメ</sup>熱<sup>カフメ</sup>水<sup>カフメ</sup>人<sup>カフメ</sup>と<sup>カフメ</sup>ら<sup>カフメ</sup>あ<sup>カフメ</sup>り<sup>カフメ</sup>て<sup>カフメ</sup>地<sup>カフメ</sup>ん<sup>カフメ</sup>お<sup>カフメ</sup>つ<sup>カフメ</sup>ら<sup>カフメ</sup>あ<sup>カフメ</sup>り。  
~~草を<sup>カフメ</sup>垣<sup>カフメ</sup>の<sup>カフメ</sup>草<sup>カフメ</sup>葉<sup>カフメ</sup>又<sup>カフメ</sup>の<sup>カフメ</sup>木<sup>カフメ</sup>の<sup>カフメ</sup>葉<sup>カフメ</sup>は<sup>カフメ</sup>熱<sup>カフメ</sup>水<sup>カフメ</sup>人<sup>カフメ</sup>と<sup>カフメ</sup>ら<sup>カフメ</sup>あ<sup>カフメ</sup>り<sup>カフメ</sup>て<sup>カフメ</sup>地<sup>カフメ</sup>ん<sup>カフメ</sup>お<sup>カフメ</sup>つ<sup>カフメ</sup>ら<sup>カフメ</sup>あ<sup>カフメ</sup>り。~~

落ちる將星 (二幕二場)

人物

汪林塘 將軍 四十四才

本子行七 部下の兵 二十七、八才

その妻 二十才

幕僚 一、二、三  
其他大勢  
兵 一、二、三

時

支那近古乱世 處

中部支那 平野中の陣營

第一幕

秋陣營の外で本子とその妻が坐して話してゐる。敵營の炫火  
がほのかに見える。

妻 さんないろくの眼にあつてきました。でも今かいてあなたとお話して  
あるとはお昔の昔のこの様と思はれます。けれどもやはり思はずとつらかつ

たねですの。もう私は二度とさんおめにはあゝ元気があらずせんゆ。  
ゆえ、いつまでもあなたのおそばにあらぬ工夫はなしてせう。

本子 わたしもお前とは別れなく、殊に今の話の程に苦しいのをよそおつ  
あつては、けいけい帰すわ。偏し私は一兵卒だ。將軍で女を召つ  
たてぬら本家のいぢやう。お前と一しよにゐることは徒に物々と同  
僚の反感の種となるばかりだ。困つたな。

妻 將軍様は願ひしたら何いせうか。大妻お情深い方だ。さうす  
のゆ。僕は私とあなたが目のかゝりました。いろく、  
なまつてを本子ですわ。

本子 うち、(考) (ニヒ)

兵、一、二、三、出でます。

本子 本子君、將軍の急をお呼びだ。

本子 何、將軍か、(妻の方へ)お前のことをお話しなす。

歸郷 (五、四、七)

増田と松竹を飛見る。UFA映画

流土風吹来木蕭々

寝窟屋聞朋虜歌

聲如哭 楸々 迫耳

將泣聲子罷 淚雖溢不流

御遠妻子新將薄

情愈厚 豈耐 平

あゝとほ三つしまこころはしけやし葉子のあゝとこころ

よふふひの 齒のへみえまこも里をめぐらし

ともどちのうちはおかしもなつあしのあゝとこころいんしん 短め

故郷はの(うら)らめもしうくもの(た)げり(か)たはるかなんじし

X X X

我家女はにどなけれどしみの心しつまういの安まこころ

久々への(へ)る家のゆか室にかはつを聞くも春開けをあか

仲春。(五、四、八)

合宿を球と追つてあゝまにいつしか春は盛となり梅も桃も花々接の

毛の印のなつを木の芽か立つ。葉の花か咲く。なんかしらさいか涼い

秋心かんいんそんではなすくない。

木の芽の白風はましろと来ふるは虎杖もてる人と葉々あはす(電車中)

つじと(写)まにけし(も)葉々の人のみゆりのあらし見入るも。

水ぬるさ水田に鳥鳴く 蛙 群ははらうず 声はとほしし。

回のまん中んついでなけるかはづ子ら鳴は尺え水ゆらぐとこころ

ほのぼのとこころゆくとまははづ子のすどく士戸(か)らしと思ふ。

かはづ子らありの葉ふひ鳴く二あもさおしおおもい(た)げりせせ。

青春のこころはこころの空の何の流るを仰り止まらず。

西風あけは臭ひはげしま溝の山岸のまははづ子花葉もてる。

話本はも芽をまたたはあが交はくくましくならんけりのも。

蛙うか左眼やそのてはけあてし欠けりそ群れよめあつて人。

わのま目もつんはすまお 櫻咲くゆもあはははその白くすも。

幼なこころいもいづるそらまの(花)はさかるとちうんけりや(フェん)

緑の風景 (DIE GRUENE LANDSCHAFT)

一九三〇、四、一四

古庭の隅々まで草木が芽をのみ

庭はくらくらひ(水)のなまのすめいとをつた

私の持つ(水)の杯も

何時の由にか濃い緑色に変わつて了

そ本はその上にかはしい匂をたてる

僕はそ本を飲んだらつた。

苦い味を

その液体が胃を通過し腸を通過して行く進行状態がはつちりゆの

つた。

腸を通過するは随分長くかつたが

その苦味は女にも吸収せらるるのつたらしい。

何故かろう儘を構成する。右様作は

左の源作の排世と其に

又元のならけたもの止つておのこをかわつたから

よふしとも此の録の風景は秋までつゞくんどうしたなや。

花々に奉る頌歌 (一九三〇。四。二四)

此れおもしろい(F)花を語つたことおみだり。くうるまんと何木もや

詩は……よふく 勿言 勿言

矢車草は英吉利の娘さん つかとすましてスカートに風

かあたのちやのめんせんか

山吹の花は ~~昔年の~~ 黄泉の國の 王女。くうい顔をして お父さんの邪智

か気にかゝる

は二へ 小つちやな娘さん お米を買ひまゐります。アラア困る

おのわ 銀貨をおとした。泣いてる

たんぽ、 私のこをちやないむせー) 私は金貨。

草 俗をこは云はない 奥山の仙人を

辛夷 白靴を木の枝に引かけた 女学校の生徒さんか

体操の時間

葉の花 田舎五月たけ木と情の厚いこをば負けなはい

情 お嬢さん あーおかわりました

青木 へうんゆえ そんをお嬢さんかち。もんか 大方 ~~女~~ エ

紫雲英 あらまあいい。口の悪い職工奴

萱 お嬢さんて私のこを、摘草してのこもの

つじ あー ~~お嬢さん~~ (まあ手あらくらやうな星のこと!!)

何いそやかんてい 先祖代々だ

ユウリツツ 又私日暮な人が来たり ちつち(逃げませ)

ヒヤシメス 面白いわ 見てませー)よ

木蓮 眠くなつたうこのとほり

しやか まあ往來中をわて

桜草 新うあんを恥しいこを出来ませんわ

月夜と兵隊 (四一〇)  
おぼろ月夜、おぼろしき夕の一隊の兵にまをさぬ地、其陰を思ふ。

UNTERMILITÄRISMは遂に我々自身を包む

仲春行道 (四一三)

石切下車、石をかき、道にまをさし、草木のたもと、水血を、  
高い山の白狐馬

高處を、下す大野、野、遠方の葉、花畑、日はかげうたり  
はるばると、遠葉の花、日は、光をひき、野を行かぬとす。  
何となく人を空を、いつくしき山は、あつと山に、行かぬとす。

東高野街道

北風はまを、に來り、日は雲上人、道、ばた、の、ゆ、ら、の、木、肌、の、た、ま

野崎村慈眼寺

花つ、い、は、さ、く、ら、う、ら、石、段、の、か、た、の、せ、い、蛇、の、な、る、音  
観世音菩薩は、厨子に、かく木ます、そのみ人、ん、会、ら、し、ま、な

傳、曰、江口君の申與祖

又、聞、く、な、ら、く、野崎の、て、ら、は、その、昔、し

江口の君と名の女、残、水、り、(詠歌)

童心は、す、る、ん、を、去、り、お、ひ、ん、つ、る、の、は、げ、朱、の、色、を、か、な、し、と、男、の

うら山は、人、お、れ、年、久、松、の、草、を、ち、り、つ、ま、う、さ、い、他、し、眺、望、絶、佳、  
こ、え、と、は、ま、く、  
こ、よ、い、こ、く、、日、た、ま、り、の、若、草、の、上、を、更、煉、と、い、か、ぬ

樓内、の外、は、を、な、ら、河、内、野、の、大、観、言、語、に、絶、す、

舞臺、金、桜、其、君、く、咲、ま、たり、若、草、日、の、く、れ、い、心、に、見、の、あ、ら、あ、や、

夫、年、始、皇、世、の、孫、ら、月、王、の、子、孫  
(奉、り、勝、の、子、孫、夫、氏、四、島、氏、と、い、ふ、蓋、し、西、土、を、こ、ま、味、草、の、)  
ま、ま、つ、祖、達、の、お、ま、せ、し、所、由、野、村、奉、に、到、り、此、の、由、り、今、も、所、  
の、老、幼、を、く、顔、ま、し、

故、郷、天、下、の、障、り、家、々、の、白、壁、光、り、し、つ、け、ま、し、と、り  
あ、る、ま、は、西、の、池、あ、り、東、の、血、の、た、ん、く、ん、は、秋、立、つ、と、こ、ろ  
あ、る、ま、は、本、々、の、あ、ひ、ま、を、道、の、よ、い、子、供、ら、本、の、け、い、の、い、と、こ、ろ  
あ、る、ま、は、北、の、丘、絶、え、水、や、せ、河、原、木、す、み、木、は、く、と、こ、ろ  
あ、る、ま、は、水、や、せ、河、原、木、す、み、木、は、く、と、こ、ろ  
あ、る、ま、は、村、の、ま、ん、中、に、寺、あ、り、て、屋、根、の、傾、斜、に、甘、口、生、か、と、こ、ろ  
水、や、せ、河、原、木、す、み、木、は、く、と、こ、ろ  
水、や、せ、河、原、木、す、み、木、は、く、と、こ、ろ  
水、や、せ、河、原、木、す、み、木、は、く、と、こ、ろ

高津の伎藝天女 (四一三)

南無伎藝天、三、味、の、手、上、り、せ、ま、(ま、た、と、か、藝、妓、の、林、や、れ、提、燈、の、あ、り、)  
わ、の、歌、も、巧、く、し、て、も、ら、う、た、の、舞、み、た、け、本、ど、妓、藝、天、女、に、顔、真、し、たり  
水、や、せ、河、原、木、す、み、木、は、く、と、こ、ろ  
水、や、せ、河、原、木、す、み、木、は、く、と、こ、ろ  
水、や、せ、河、原、木、す、み、木、は、く、と、こ、ろ

仲春吹笛 (四一八)

日、を、い、も、す、か、ら、片、園、に、一、人、す、わ、り、て、曲、を、吹、く  
水、や、せ、河、原、木、す、み、木、は、く、と、こ、ろ  
水、や、せ、河、原、木、す、み、木、は、く、と、こ、ろ  
水、や、せ、河、原、木、す、み、木、は、く、と、こ、ろ  
さ、び、し、ま、に、丘、を、下、水、は、り、月、出、で、ぬ

その、夜、も、ま、か、に、窓、を、閉、あ、、開、、け、、か、、の、、園、、を、、眺、、み、、水、、は、  
園、境、の、高、峯、に、つ、く、若、草、の、斜、面、を

ゆかしの日のまひの行く見ゆ。

行きゆきていつちにとまるらむ。是は

あはれ。そは目と(てまたわが胸にか)うまもの口。

自嘲(五、四、三)

おほろかに春陽すもも落の葉の下ははるばるとも(や  
青葉葉、青葉、それにてす陽はあかしくも 夏近づけば 反射強のうら  
何と云はんとしてやあゝ自身をか(うみるくせつまにける)かも

思は醒生夢死 生きて誰か損益せん

一死すも愛惜するものなし

春日我もいつくしあとも

徳ん春の逝くを嘆くを悲め

山嶺丘稜まのほるとも

命の終らぬも思ひて不果せず

わが木こわおのうをとおもひ吾輩をなやましむとをいふあす木(細く果す)

人生悲無知己(五、四、三)

あゝ人の指環に目をつけてあたとて

僕の盞を誰か知らず

お嬢さんのおとめをぬすみ、たとて

僕の二つ心を誰か知りませ

橋のてすうともたてあたとて  
僕か一死をいとしてあるを人て誰まを(はしまい)

x x

お父さん

あなただか死ぬといつたつて

僕は決して死にません

不文さん

僕は死ぬといつたら

いから止めをて駄目なうらすよ。

x x

三階の教室の窓縁にすわて

体と幸分外にあしてあつて

もう一尺何をすうらうたら死ぬのたなと思ふ

生と死とは只此の一尺おけなりだ

何の機会に 何のした心の初まで

僕は死ぬのたと思ふといふくおれしい

人向う命をうて安つ向うものたなと思ふ



可憐なこゝろ  
しとしと  
しとしと

雨降るとも

向うの侍を嘆くもの  
わがのほかにあらぬや、わがのほかに……

X X

死を志して今更ら何ぞの心  
何ぞか氣遣ふ

二つ雨降るとも  
明日も着るへまものなまや

――はた、このむらさきこゝろ――

**杜鵑** 花の咲く頃のこゝろ (五、四、二七)

こゝろめい一死なむと思ひ、  
わがとわをこゝろすす  
死なむすんぞくあることを  
知るなばいふたひしくまらん

**銀菊** 玉手ん花

掠奪の木の肉を鳥が  
ほのろし  
こゝろ池のさうす  
し  
し  
し

銀菊のほしこゝろの猶  
まらぬや  
満  
羊歯の葉  
とほつ人  
青葉の山

満ちる花は  
羊歯の葉の  
とほつ人の心  
青葉の山

つたふはこころ  
197 泉水の玉手ん  
六甲山  
摩耶山

197 泉水の玉手ん  
六甲山 摩耶山  
口語歌成作

一体の淵子  
山道の曲  
木苗の花

山吹の花  
日向の鐘  
遠くから見  
煙草を吸  
舌の奥  
人の實

煙草を吸  
舌の奥  
人の實

人の實の  
いふ人  
こゝろか

七 不良外人の由

日本の娘と活して

やはら外人はしむたことあり

ハ ありて者の日本人は

山道で支那人のうす

引つくりつくる (摩訶山道)

九 支那人の金とくらべて

山道で下をうけた奴の

青い顔の色

十 金のことをは

日本人のこぼれ汚い

丸石相好がまはつてふ

十一 この道は曲り角まで

向く一人、こころを木で

ふくりとをふ

十二 山、山、山

一重なりつて霞がふ

もやの奥には舟渡り園地な

十三 山にまこしめけ人肉

こころと思ふ

向うの山に人があるよ

十四 向うの山の頂に丸い木

花かおこころうへ向いて

叫ぶおれも思ふ

十五 山波の遠くのもの

うすく見えて

子供の頃の思い出の標に

十六 どんとと日暮つた空には

動くものなし

しみみにたまきたる気の圧力

十七 混血児がキヤンサーおしして

生垣の中の

いすくらうい石の上で (神戸上野山)

十八 あいこの日、

正しのおけ

やはらほらにはハローといふほしい

此の頃の心算はしはかり教官ん士 (禮) はあはず

棟樑の巨匠、此の頃を雨予け成旦す、~~実~~とならぬ

やくやくと強き陽おし、芍薬木の蕾に、蟻はあふたおけ

芍薬木の蕾いつどお蟻のあふ、~~葉~~の一本、~~葉~~もあふ

日並つて芍薬の花も開きたり、蟻の一群はあふたけり

昔より吹かぬ午後あおしあ、白流小で教室へ入る

昔よりま水高き申書なり、~~路~~とあて中空の月をまろく見

飛龍球ころあとい見上る、たまゆら、澄み切小の空に、~~書~~の月ゆらくを思

いつしめのすまらめ、つまた木は、かなし主人と、わあ木をけり

をよめ子を一目おし、ま、こころはあすうを、このわあ、あうせる

はかなまこころ、わあをわらひ、まよとよまは、こころいあせく、わあ、ああし

田舎の鳥と、こころから来て、おし、鳥、ま、この書は、教室に、蛙をまけり

229

和、高商と、試合、九折にて、敗る (五、五、一一)

青空の下に、憂鬱、抱けば、過ぎた日のあらゆる、いやな思出が

わんわん、帰る鳥の如く、胸に、帰つて、おす、そのは、いたまに、耐 (難)

胸が痛む

おまくと、おま、沖、く、浪の、千重、しく、く、こころ、ま、わ、お

五月の山は若葉未陽に水あつて下木つらば紅きにすむたり。  
飛べよ鳥、からす田にわたるものもなむ。たれしうちはまじしかりけり。

玉あか煙の畦道のすゝんぼの花盛りなり南唐更紗にまじ似たりける。  
玉あか煙の女心坊主は(出ヒケル)車窓の如外の玉あか煙の青

THOMAS MANN の TONIOO KLEGGEL とはわかこにはあらずや

(増田元及其他の人に)

二つの魂相あはむとしてつひにはたえず自らなる性質の差ゆえ

(病をけりぬ田原成に 五.一〇)

青葉まき草に向(る)部屋に宿れ君は口敷のりけり。  
枇杷の葉の末の青まき草は見えたり、春にゆたう君も見えなくは。

君の中の水を望みまむを叙す水どしかなるまを君をいとはむ。(再び増田君に)

五月野に草は熟(れ)水あか野を遠く伏虎城の樹々見えたりけり。

はるばると他の地に來り友とあひ入水ぬ心を水は抱けり。

ゆにみこもしたるまき草の。林場上我を見出して噴きまき草しむ。

城山の樟の大樹の下道を友とあひ入り樟の白くす。(佐々木三九一氏)

243. 此の友の心(水)水をはなるかにミコウかちうのす  
ひなにもまします。

TONIOO KLEGGEL

君を想へば

我が胸は浪暗まはつ海潮騒に若鳴し

君は君が友の向の心をしめくかきしと思ふ。

そは手質の深く、  
痛を染けたるは、  
友にきりくと  
何とすははそは一つの人間としての友の心の動きを無視するに。

我々の期待は常に自分の向つてある方向にのみあつた。

とにみく TONIOO KLEGGEL 君を想へば

我胸にははつ海潮騒に浪うまむと向つて飛沫のとらふ感はら水。

いつれ。

(五.五.一四)

信太山(演習) (五.五.一六)

まいる中竹の林にすむおちはいそやのしして地にあつるおと。

管上たせせりみかきははむらなり竹の若葉も光りいらぬま。

あまつ日は地にぬきそむわ水ら疲る赤松の樹に蟬のなくこる。

演習も終りてわ水らか(る)道蜜柑の花の白くま水。

248 小虫のまき草を吸むた水はいしもちまう、白花開けり食む、若葉には未だ虫を保つ。

ゆいん木の理髪(ミ.五.二〇)

ゆいん木の理髪、床の鏡の中通り、魔のこゝ人すおゆけり。

250 手足の肌を削りつ、たのしさをわたり、  
手足の肌を削りつ、たのしさをわたり、  
手足の肌を削りつ、たのしさをわたり、

手足の肌を削りつ、たのしさをわたり、  
手足の肌を削りつ、たのしさをわたり、  
手足の肌を削りつ、たのしさをわたり、

昭和五年五月廿四日  
領、（らうんこあ水、此の日

云々  
坂井正夫あり 地上は雲心ちく  
坂井正夫君

明治四十四年四月一日 誕生  
昭和五年五月廿三日午時廿七分 永眠

二度と見られぬと思つた君の顔を  
見せて貰つた、心は有り難いとは言ふが

君は花に包まれて静かに眠るゝ

ほくの眼りにすがりて静かに眠るゝ  
顔もそそ

君は花に包まれて静かに眠るゝ  
顔もそそ

君は花に包まれて静かに眠るゝ  
顔もそそ

君は花に包まれて静かに眠るゝ  
顔もそそ

君は花に包まれて静かに眠るゝ  
顔もそそ

君は花に包まれて静かに眠るゝ  
顔もそそ

君は花に包まれて静かに眠るゝ  
顔もそそ

君は花に包まれて静かに眠るゝ  
顔もそそ

君は花に包まれて静かに眠るゝ  
顔もそそ

君は花に包まれて静かに眠るゝ  
顔もそそ

君は花に包まれて静かに眠るゝ  
顔もそそ

君は花に包まれて静かに眠るゝ  
顔もそそ

君は花に包まれて静かに眠るゝ  
顔もそそ

君は花に包まれて静かに眠るゝ  
顔もそそ

花に包まれても君は静かに眠るゝ

君は花に包まれても君は静かに眠るゝ

君は花に包まれても君は静かに眠るゝ

君は花に包まれても君は静かに眠るゝ

君は花に包まれても君は静かに眠るゝ

君は花に包まれても君は静かに眠るゝ

君は花に包まれても君は静かに眠るゝ

君は花に包まれても君は静かに眠るゝ

君は花に包まれても君は静かに眠るゝ

君は花に包まれても君は静かに眠るゝ

君は花に包まれても君は静かに眠るゝ

君は花に包まれても君は静かに眠るゝ

君は花に包まれても君は静かに眠るゝ

君は花に包まれても君は静かに眠るゝ

君は花に包まれても君は静かに眠るゝ

君は花に包まれても君は静かに眠るゝ

君は花に包まれても君は静かに眠るゝ

君は花に包まれても君は静かに眠るゝ

君は花に包まれても君は静かに眠るゝ

君は花に包まれても君は静かに眠るゝ

君は花に包まれても君は静かに眠るゝ

君は花に包まれても君は静かに眠るゝ

君は花に包まれても君は静かに眠るゝ

君は花に包まれても君は静かに眠るゝ

さしはありのたを説けるときめどかへりみてしかうたるとま  
(二小や三の昨日のまじし。今日もはすすまむ)

大坂城懐古 (五、五、二九)

日の光かやん午後巨城の石壁の草は聖女人とする。  
石垣のスロープはしみじみとまよる。石向に黄色なまんの群集。  
石垣の傾斜ゆるり涼なる。石垣にうつくしき亀のた。  
未だ頼公の最期ちみつきぬ。この城は石垣固くふる遠なる。  
あのか身を守るところは今にして逃げみちをまんとすなりけり。  
あま守の空をほろほろの見ゆるとき未だ頼母子は生かします。  
青濠に浮ふかいつかり。鳩鳥は玉を藻をかつきました。水面に。  
あま陽のすみづかひをかくさせるところ。あまの門を兵。  
何をもなまこと。(五、五、二七)

あまもり雨降らんとするけはあま聖女んあま。(アールの聖女)  
遊行すと思ふ聖女うたむといふ朝の空はくもる

いつしあはて車草の花実まぬ。あまの心あすつかをぬぬ。

この月にならんとした。野の果の穂を丘陵にまの空小り。

この園にゆかへまはすいかけの青ま葉かげ御堂はみえずなる。

初夏の風景 (五、六、八)

その一

に直の書。ひそやかに。穴の雲

南に流る水は。風。死す。

日の光は。しみじみと。目もく。

あかしの木の。葉は葉小る。

誰か。ま遠く。ハモカを吹いてる。

その二

魚は腹を見せて池に。浮き上り。

石油の臭は。風に。乗って来り。

ま遠くの。路を。行く。洋傘は。

くるくると。廻つて。来り。入る。

あゝ。この時。立見もなく。雲は。

山の山嶺を。立ち昇る。

その三

木蓮の。梢に。花が。咲く。ころは。

蛇は。日毎に。皮を。脱ぐ。

まもなく。それは。木蓮の。木に

登つて。行くであらう。

その四

梅雨前の。山脈の。緑は。妙に。

圧力を。僕に。加へる。そのから。

百合の花が。毎日。衛に。運は小る。



一頁以中

(律) 下目

一國十山石

523.3.505

今分區...

... ..

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

今井俊一 昭和三年十二月十二日

二十五才

慶応三年 愛宕郡 下

奈良師範学校卒業

大正十学校校長

今井俊一 (1888-1913) 奈良師範学校卒業  
大正十学校校長

今井俊一 (1888-1913) 奈良師範学校卒業  
大正十学校校長

今井俊一 (1888-1913) 奈良師範学校卒業  
大正十学校校長

今井俊一